



江戸名所図會

三



三縁山増上寺

廣度院と號關東淨家の總本寺十八檀林の

冠首して盛大の佛域より百一代

後小松院の

開山八大蓮社西譽上人中興者

普光觀智國師

十八檀林ハ武徳常野宮ニ存在セリ阿彌陀佛六八本願の中ニ十八檀林ハ

以て最勝と云ふ小因ミ御當家御稱号松平氏の松平氏ノ封を受く其字や

能く精舎十八區を建てる永く梅檀林と云ふ是と松平氏の松平氏ノ封を受く其字や

本堂本尊阿彌陀如來

惠心僧都の作中座像長四尺

額 三縁山廓山上人真蹟

上人ハ當寺歴十三世なり甲州の産なり

御經藏

本堂の前左の方辨の中ニあり或人云くは納子所の一代藏經也

後彦玖兵衛尉

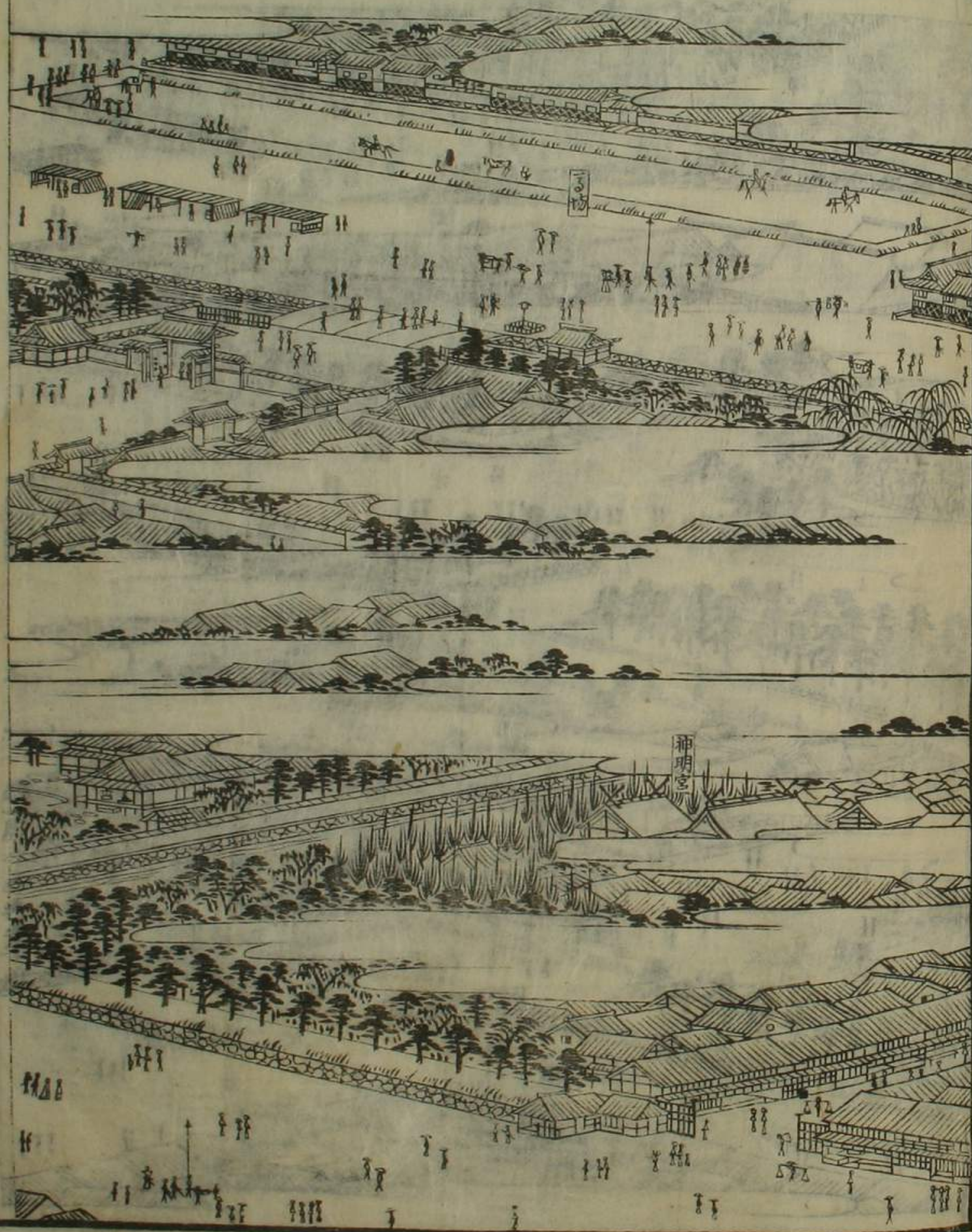
台余を奉り當山よりつとをたり

開山堂

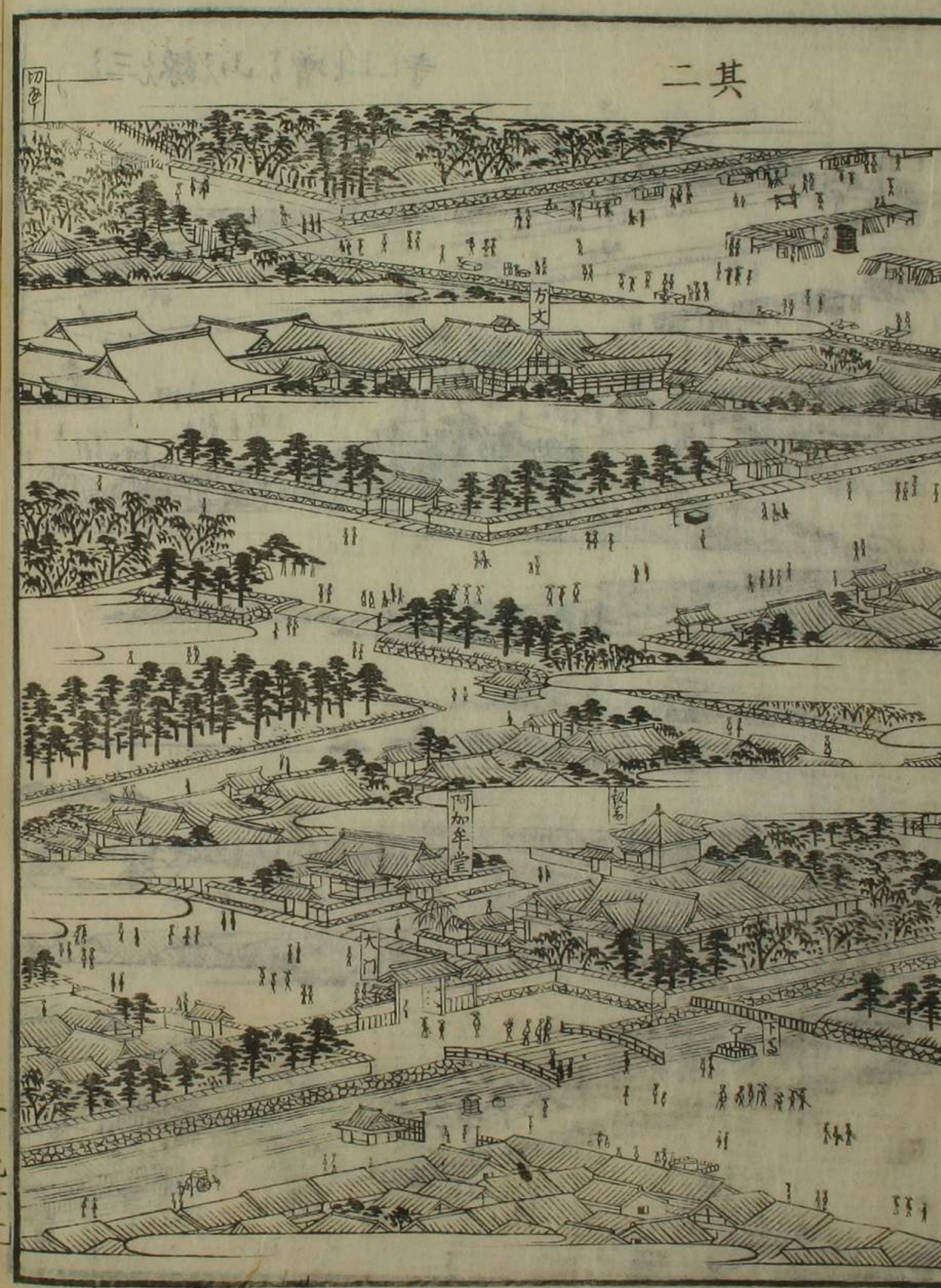
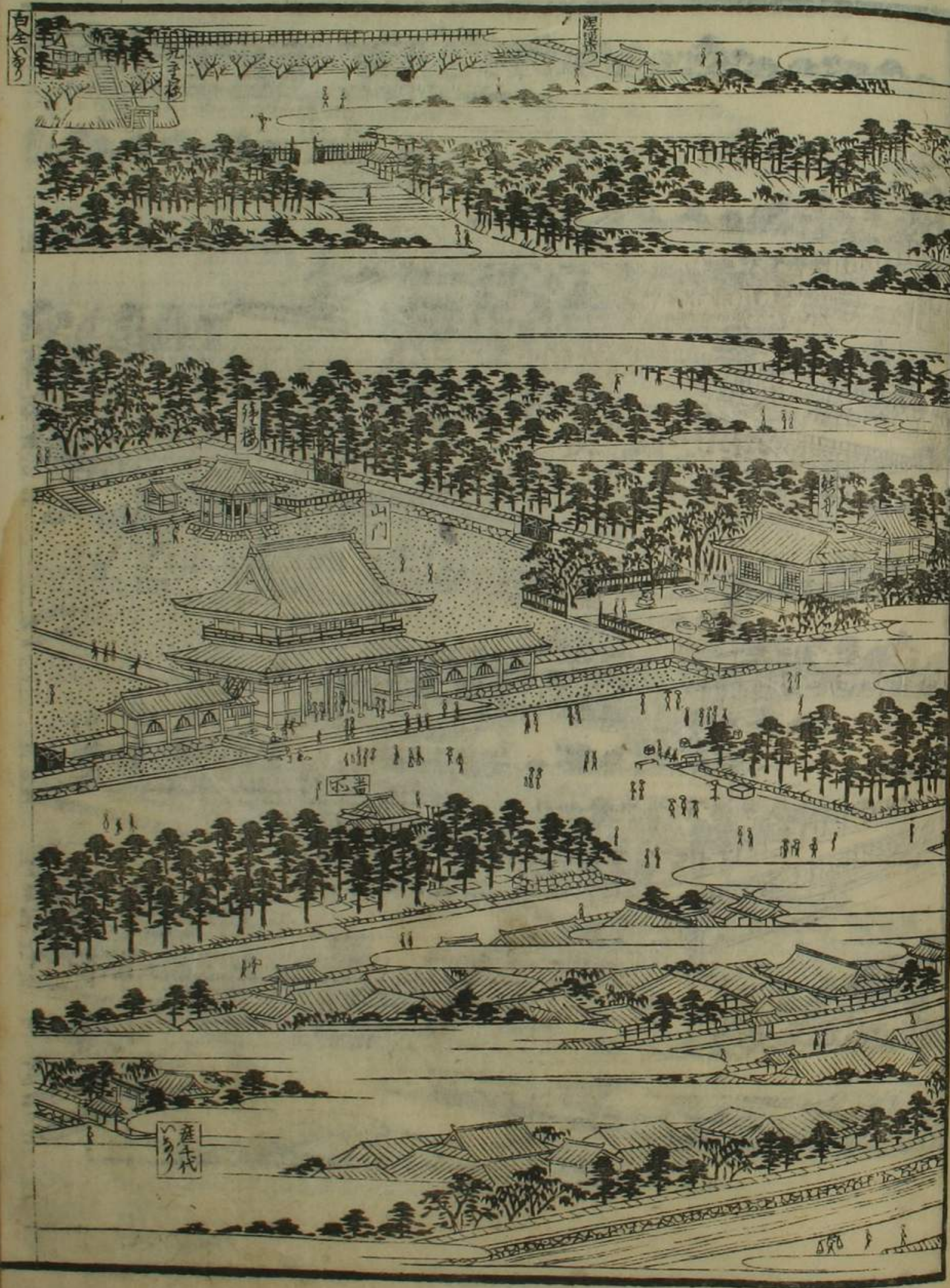
同所左より當寺開山以下累世大僧の

遺像を安置せり

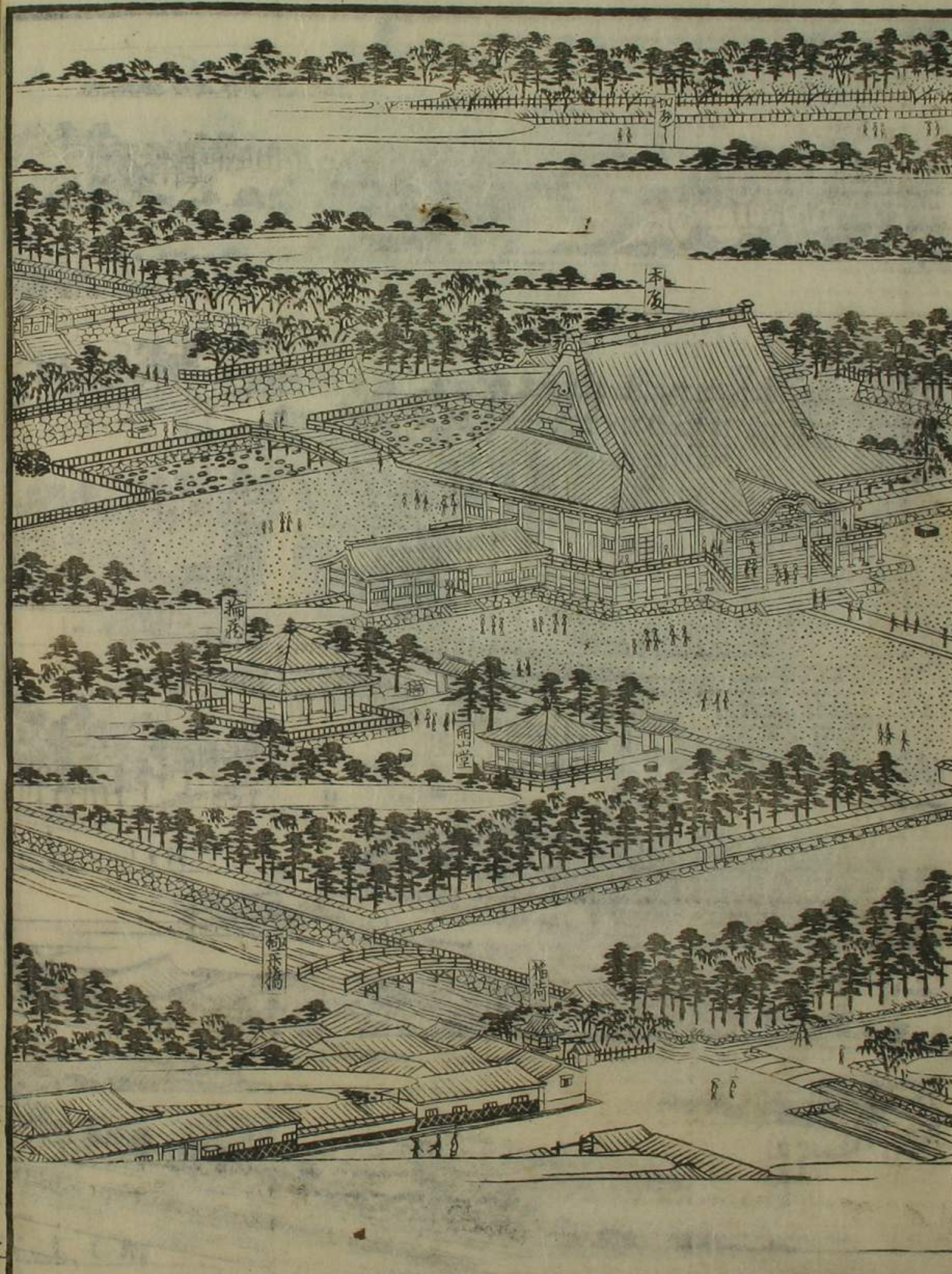
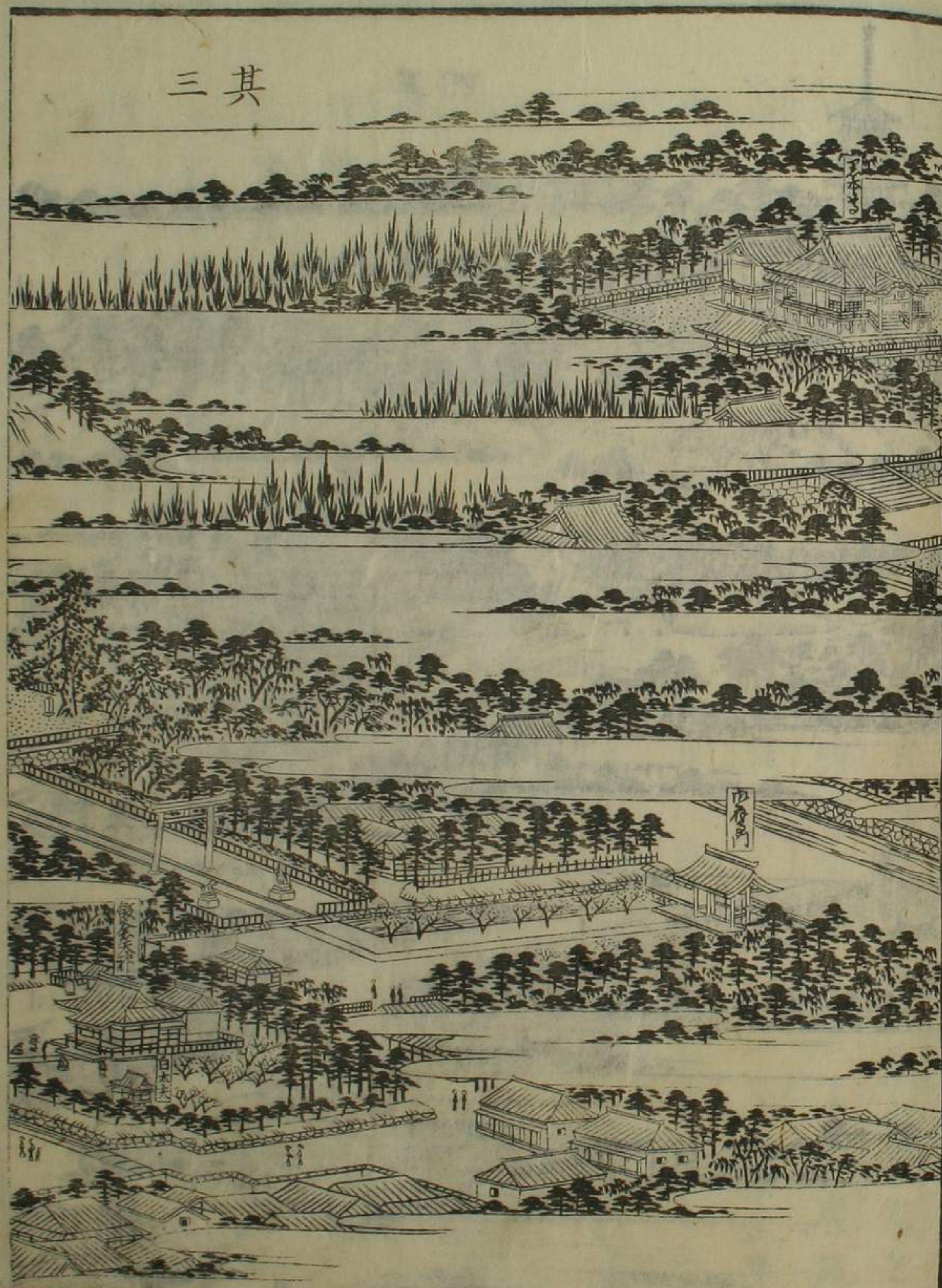
寺上増山縁三



開山西譽上人諱ハ聖聰大蓮社と号シ 鎮西武蔵 貞治五年
 七月十日 千葉系圖貞治二年 北總の千葉に生る父ハ千葉陸奥守
 氏胤母ハ新田氏あり童名を徳壽丸と云 十代より加冠して
 胤明と称す出離の志深く釋典を慕み九歳より遂は同國
 千葉寺に入り落飾し初は密教を學び後同公は授歸して淨
 宗に入り智道倍熾なり其後武州豊島郡江戸貝塚の光明寺に
 住せり 今増上寺是なり江戸名勝志云増上寺の 此寺始ハ真言瑜伽の
 道場なり一竟ハ光明寺を改めて三縁山増上寺と号し宗
 風を轉し淨業の精舎とす 永享十二年庚申七月十八日
 寂ハ歳七十五臘六十七 東國高僧傳ハ應永二十四年 中興開山
 勅賜普光觀智國師諱ハ存應字ハ慈昌貞蓮社源譽上人
 と号す 平山左衛門尉季重の後裔なり 傳燈 天文十三年 獲國篇
 武州由木に生る始衣と片山の宝臺寺に樞ひ十八歳感譽



三其



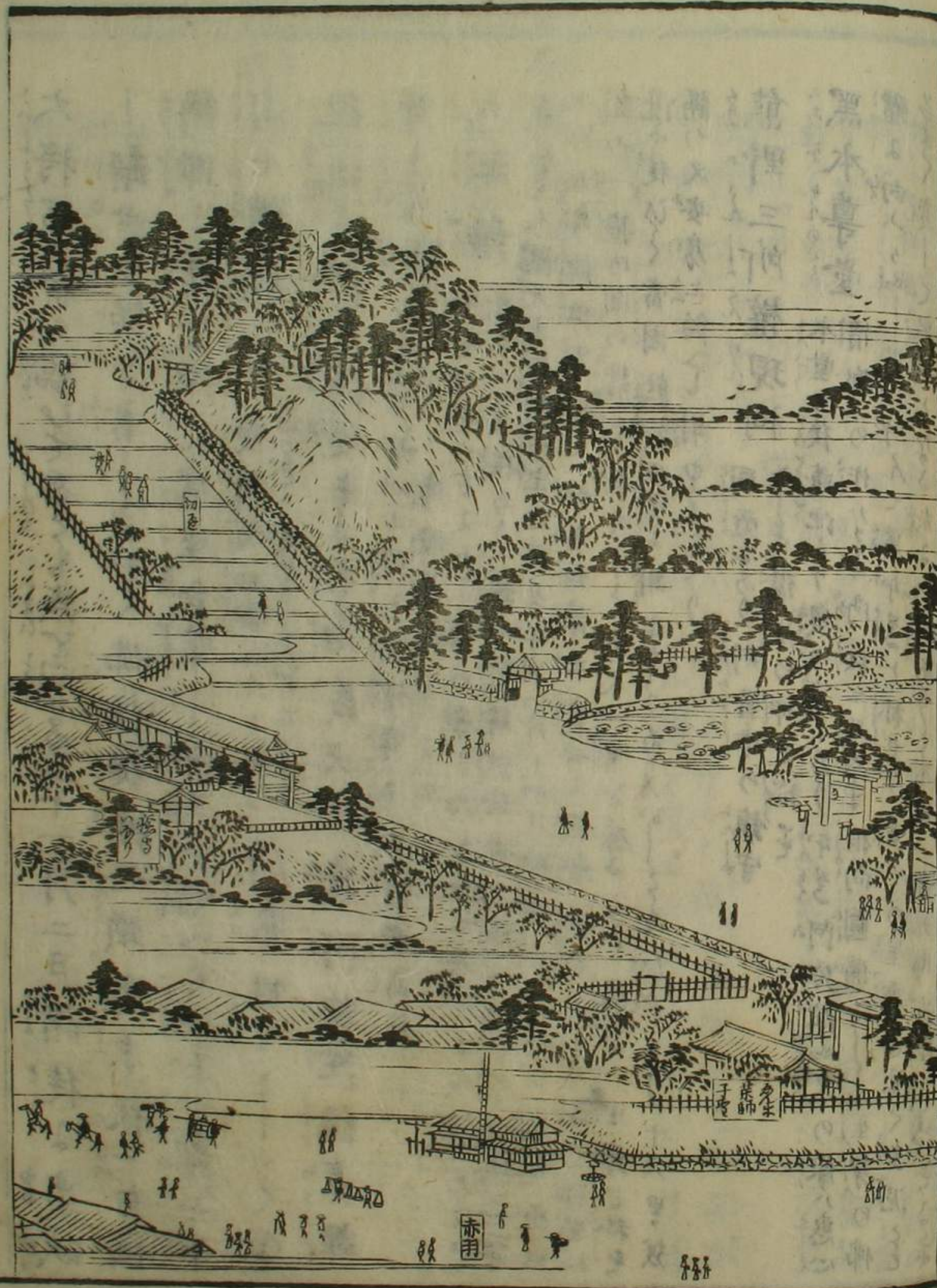
其四



上人は歸りて登壇受戒を天資聰悟より顯密の教を
究む上人没後上叢に到り長傳寺を創り大に法席を
開く人呼て教海の義龍蓮苑に祥鳳といふ天正十三年
雲譽上人の會下よりあり同十七年八月聖書を傳兼りて
増上寺第十二世となる當寺第十二世より同十八年天下安靖なるに逮
んで大に

大神君の眷顧を多し屢宮中へ請せしむる法要を聴
受し多し崇信他は異なり竟に増上寺を修營せしむる
植福の地なり又

後陽成帝師と宮内は徴し道と向り盛に淨教に深
旨を陳せ獻感ありて褒章を加へ新に宸翰を深き
持し普光觀智國師の號を賜ふ時は慶長十五年七月十
九日なり元和六年師微恙を承り嗣君



五人の石塔あり、柳の井あり、同所
南の坂通りあり、名泉あり、
飯倉天満宮、天神谷あり、當山の地主神なり、昔飯倉の神明も此地あり
別當寺、茅野天満宮、同所、南の方松林院あり、
舊跡、山下谷明定院あり、是も當山の別院なり、明定院前大僧正、月
圓座松、同所、圓山同所、辨財天祠、赤羽門の内蓮池の中島あり、
右大将頼朝卿法念の法花堂は安置あり、星霜を往く、後觀智國師感
得あり、當寺宝庫は納めあり、と眞享二年生誓靈玄上人此所は一字と
建、一山の法守とあり、と宝珠院別當より中島と芙蓉洲と号く
此所門より外ハ赤羽門とあり、品川への街道なり、
子聖權現社、青林院別當、産千代稻荷、觀智院あり、昔ハ普光院
明誓壇通上人の阿加牟堂、東の大門の通り常照院あり、
大門、東は向、當山の總門なり、御成門、北の方馬場は相對す、此所
涅槃門、切通の上はあり、惠照院ハ柵門、山下谷より赤羽門へ、
當寺旧古、貝塚の地はあり、光明寺と跡せ、眞言
瑜伽の密場中々、後小松院の御願は依る草創ありし

古刹なり、至德二年酉、普上人移り住む、の後竟る普
上人、傳通院三ヶ月の德化し、歸一寺と改め、三縁山増上寺と
號し、宗風を轉し、浄刹と爲す、事跡合考は、此所三縁山歴代系
今、杭町邊中項、移す、此谷邊、後慶長、初、移す、此谷より芝へ
移す、ハ慶長三年戊戌八月、武德、編年集成は、慶長三年戊戌、
天正十八年辛卯、平川口へ移され、増上寺と芝の地は、つとあり、平川口
此谷古へ地と接も、混し、
東照大神君、天正十八年始、江戸の大城に入らせ、や、九州民
鼓腹し、老幼相携、道路は拜迎し、奉る幸は、寺門の前路と
通所あり、あり、觀智國師も是を拜せん、と、寺前
あり、是則、此谷の時、師の道貌雄毅尋常なり、と、見
それ、と、ひ其名を問せ、と、乃寺に入、と、憩ひ、其後當
寺を以、植福の地とかり、ひ、永く師檀の御契約あり、
所崇敬あり、屢、師を當中は清せ、と、法要を聽受なり、ひ、待さふ
祀を殊、と、是と親王は比せ、と、師を、と、衆興、と、殿階は昇る、と、
得、と、以、と、永式と、今、至、と、時、寺境隘狭中々あり、
歴代の住持成、この業を、と、く、

大城は接近せしむるに依り今の地に移さる大資財を
喜捨し殿堂房室に至る悉く營建し最宏壯の大梵
刹と爲す事跡合考は慶長十年己巳本堂
四廊等造営あり大伽藍と云於是浄家の宗教一時
勃興念佛の聲天下に洋溢たり今夜祥夢を感て師微笑し云く其夢を驚け吾買んとく青銅二十
疋を果ふ既やて翁云く増上寺軒端の母木繋る人師曰く吉徴あり慎て
人は終るべきなりと果し翌日伽藍營後の命ありく竟に宏構鉅材天正
廿觀となり由浄土高僧傳なり
抑當山ハ關東淨刹の冠首なり龍象の聚る所實に靈山
會上布金紺園也此に人數百戸の学寮ハ疊々々々
軒端を輾る支院ハ三十餘宇靡くくくを連る三千
餘の大衆ハ常にあふ集る中やも能化ハ一代の法蔵を胸間
貯へ所化ハ十二の教文を眼裡に晒せり三心即一の窓の前
わ五念四修の月を弄ひ事理俱頓の林花中や実報受
用の花を詠す佛閣の莊麗る七宝莊嚴の浄土も又此を

去る事遠くしと思はる

御忌参正月涅槃會二月誕生會四月開山忌七月十八日
廿五日 十五日 十五日 十五日
十夜法會十月六日より同十
五日迄修修す

飯倉神明宮 同東の方神明町あり江戸名所記等ハ日比谷神明と
あり今俗間之神明と稱せ
其舊地ハ増上寺境内飯倉天神の社地なり或云赤羽の南小
名所記ハ往古當社の神
名宣あり

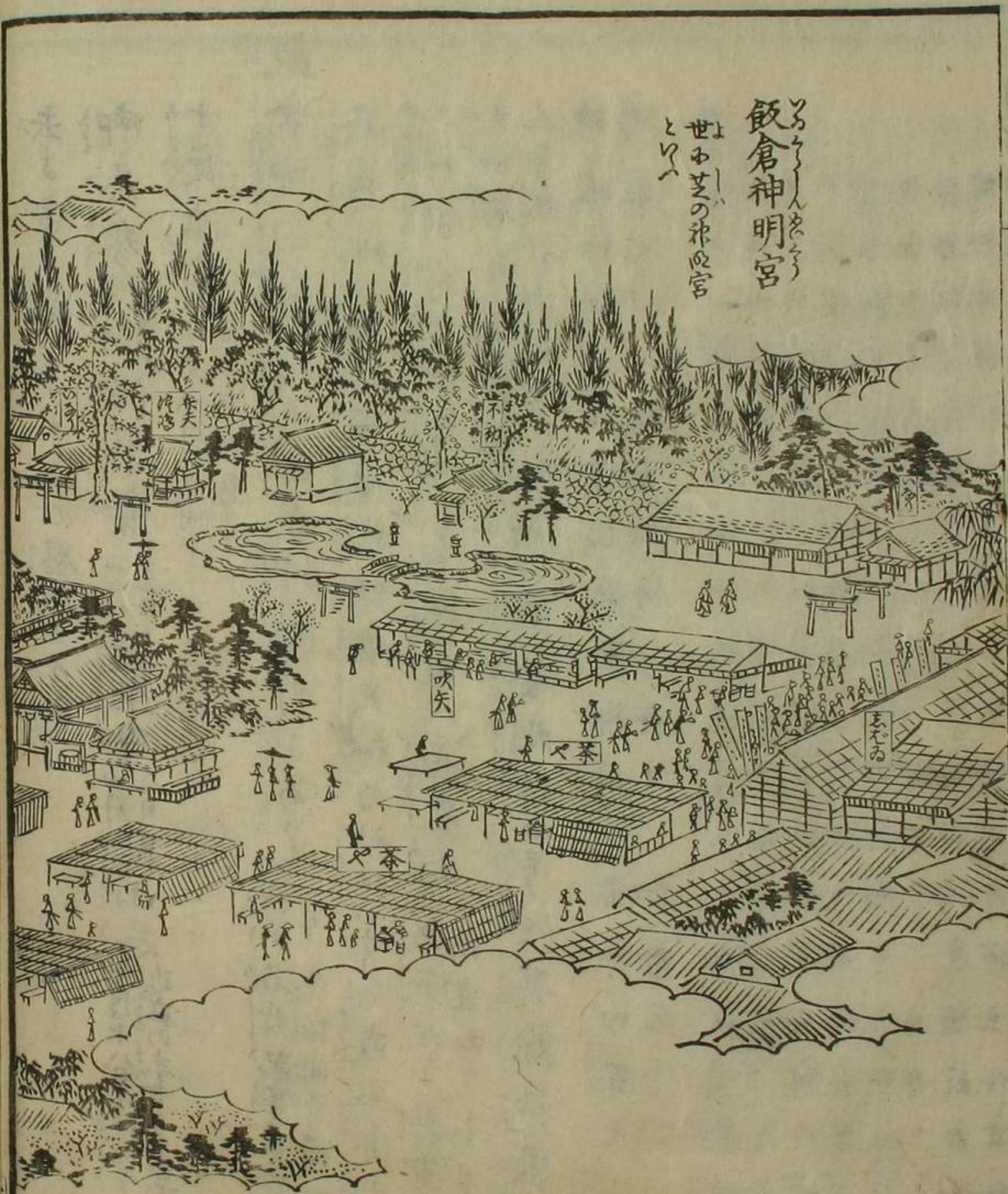
山神明宮の地なりとも社司ハ西東氏名宣あり
芝柄郡より齊藤氏なる別當ハ金剛院と号し其餘社家巫女あり
人を招く神主とす云

神鳳抄云 武蔵國飯倉御厨當時四貫文
御幣五十丁
同書又曰 飯倉御厨 長日

東鑑曰 壽永三年甲辰五月三日庚寅武衛被奉
寄附而村於二所大神宮去永曆元年二月御出
京之刻感靈夢之後當宮事御信仰興他社然者
平家黨類等在伊勢國之由依觸令風聞遣軍士之
時若縦雖不可亂入神之明御鎮座砌之事由於祠宮
無左右不謂件所荒木田御成分武蔵國飯倉御厨
被仰付當宮一禰宜荒木田御成分武蔵國飯倉御厨



飯倉神明宮
世々芝の神宮
といへ





九月十六日
飯倉神明宮祭礼
ササキヤ
土日廿一日迄
多海路某氏



一振と納め一千三百餘貫の美田を寄附あり其項繁昌の
 宮居たり一遙小後明應三年伊勢新九郎氏茂小田原北
 城主大森實頼と亡く後威と逞うせ頃是より為に神
 領を掠せし依宮社ハ霧ヲ朽風ニ破も奉祀の人も
 なく大ニ荒廢したりと天正ニ至り四海昌平の時
 忝も台命より當社の廢れしを興へし神領若
 干と附せし又寛永十一年甲戌より神殿を修造
 たりありし社頭舊觀を復す依神燈の光ニ赫々
 とし和光の月よあそへ利物の花ゆきハ白く深く
 神威昔も倍せし當社の祭例ハ九月十六日なり同日ハ
 至るの参詣群集を商ひ物多き中めと
 藤の花を画きる繪割菴にハ土生薑珠ハ
 生薑祭とも唱へり此名所ハ土生薑珠ハ
 令ハ題と驚く繪割菴を俗にちきと名つ又生薑を賣りハ之
 きよりありしを救ふあり

宇田川橋 宇田川町の大通りと横切く流る小溝は架せり

比谷
 稻荷社

毎年初午祭ハ二日
 ありより係助町に
 三丁目より様少く
 佐を補理ハ律典
 此邊の藩昌
 あり



鳥森
稻荷社



今ハ上ノ土を覆ふた橋の形を失ふ
宇田或ハ小田原北條

家の臣宇多川和泉守とて人架せと云傳ハ
小田原北條

朝興北条氏總は責め品川表を戦ふと云余下は氏總朝興と云首とも
四年上杉修理亮

実驗ありて後品川の住人宇田川和泉守以下降参の者とも云つて普清後人
ころは品川とあり東海道驛路鈴屋長祿元年丁丑四月八日大田道灌江

うの其後宇多川和泉守長清ハ品川の館は住とあり又元禄開校の江戸鹿子と
て草紙は昔此所へ宇田といふ刀を墮しとる此名ありといふ燈とるふ

日比谷稻荷祠芝口三丁目西の裏通よりあり
此町中至く狭し

本山方比修驗寂靜院別當より萬治の頃藍屋五兵衛と
土人田中至と云す

とる者託宣は依る花洛藤森の稻荷を勧清なせしや
此町中至く狭し

鳥森稻荷社幸橋より二丁中の方酒井下野侯郎の北比
此町中至く狭し

横通よりあり往古よりの鎮座といふと年歴来由共は詳
な

なり元禄開校の江戸鹿子といふ草紙は天慶年間藤原
秀卿將門退治の時の勧清なりといふと信し

あるありと當社の神宝は古き鰐口一口を納む
表は元暦
元甲辰年

櫻川

同所愛宕の麓と東南へ流る溝川とあり名く新

著聞集は昔虎の門の辺より愛宕の辺迄悉く田畑あり

畔は櫻樹幾株ともなくあり其中を流るる櫻川と

いひとあり下流は宇田川橋の方へ流き又三縁山

摩尼珠山真福寺

櫻川の西岸は傍ひくあり新義の真言宗

中江戶四箇寺の一員知積院の觸頭なり當寺本尊

藥師如來の靈像弘法大師の作なり慶長の頃甲州の領

主浅野長政當寺中興照海上人として自らの等身は藥師

佛の像を手刻せし件の靈佛を其胎中より籠なりと

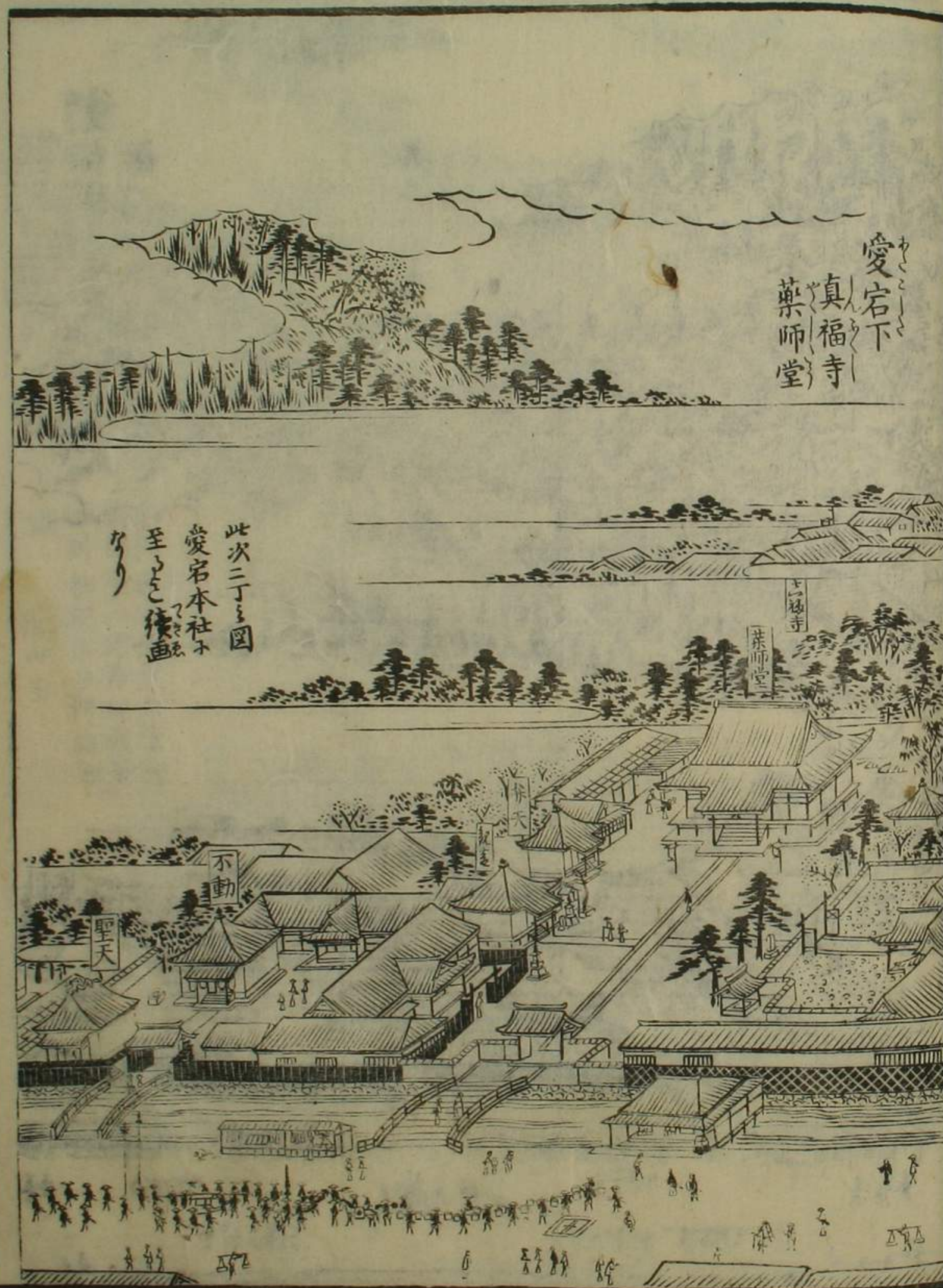
いひて參詣多し

愛宕山推現社

同南に並み世俗城川愛宕山は同一と云

自ら別なり本地佛を勝軍地藏尊あり行基大士の作

なり永く火災を退けしもの守護神なり樓門の金剛力士ハ



愛宕山下
真福寺
藥師堂

此次三丁目
愛宕本社
至るは後
なり



其三

山上
愛宕山權現
本社園



宕山高倚勝軍宮
晴日登臨積水東
江樹千里連關下
海雲一半傍城中
祇憐精衛仍含木
誰識鵬鷃忽數風
羞殺魚鹽都會地
治生無似陶朱公

服元喬



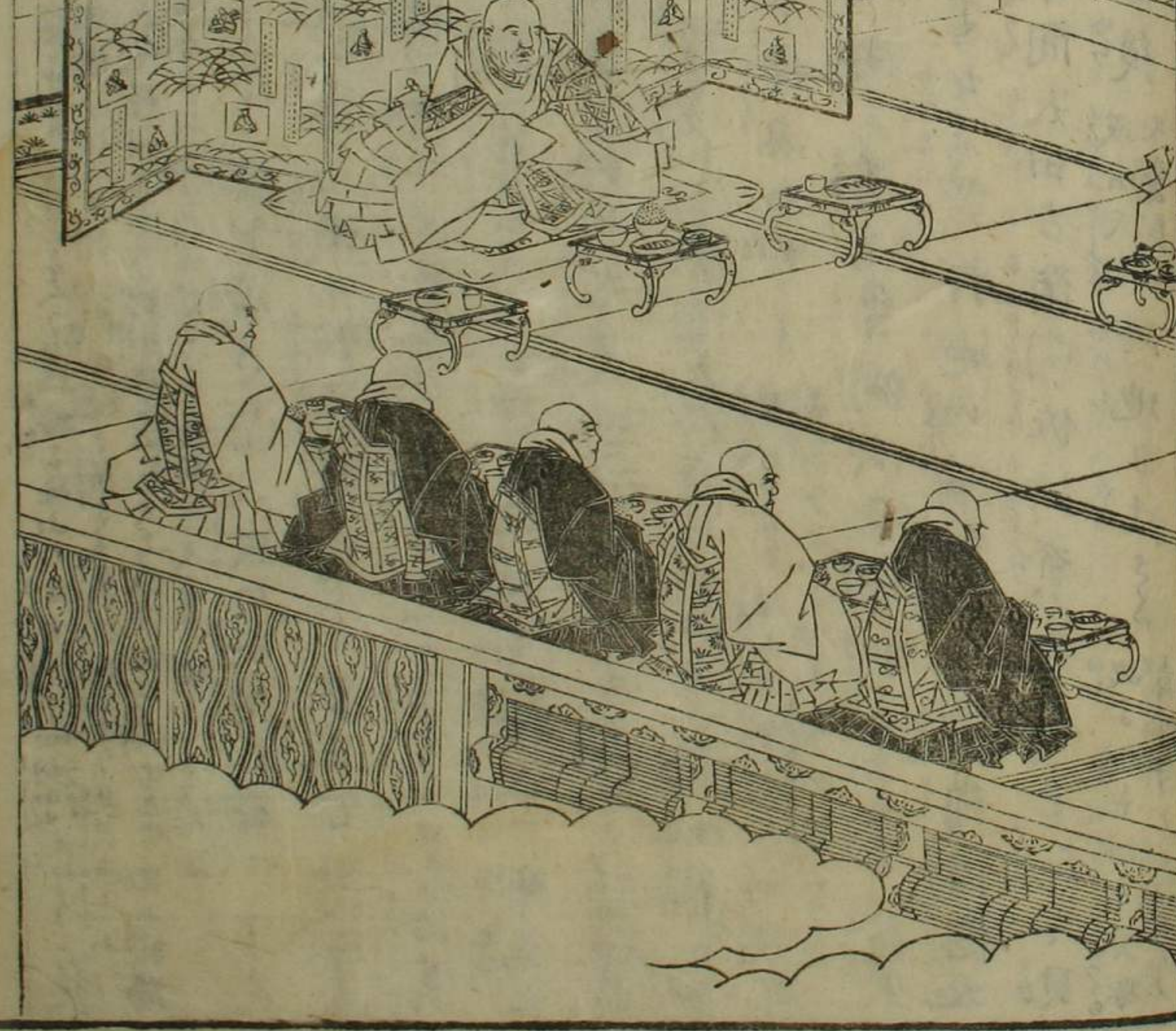
運慶の作同二階の軒は掲一愛宕山の三字ハ智積院推
大僧正の筆なり別當圓福教寺ハ石階の下あり新義の
真言宗江戸の觸頭四箇寺の隨一なり開山を神證上人と
號と二世俊賀上人といふ當所真福寺並み當寺なり
神證上人字を春音といひ俊賀上人字を春香といひ下野の人なり姓を
盛谷氏母ハ皆川氏なり元和五年鈞命は依る金剛院は退居をゆる
天平と後春音の坊ハ遍照院と号す今の圓福寺是なり金剛院普賢院
滿藏院鏡照院壽挂院等より六院あり俊賀上人字ハ圓精と号す近律神
西の邑の人姓ハ越路氏なり宇都宮三郎頼綱の後裔父ハ伊勢守近律神
祠ハ所産す其始下妻の圓福寺に住を然る其項下從結城の元壽上州
松井田秀等一世の豪俊なり俊賀上人とあはせ新義の三傑と稱せし
元和五年俊賀上人愛宕權現の別當に年せられ共圓福寺の号と稱し一字と
關り學徒衆より大法幢と樹大法鼓と擊夏冬廢る實ハ江城權林の權輿なり
縁起曰天平十年戊寅行基大士江州信樂の辺行化の時當
社の本地將軍地藏尊の像を彫刻しあひ後安部内親王は
奉弟四十六代孝謙天皇の御子なり親王則彼地は宝祠と當し是を安置か
り其田跡と名つく然るふ天平十年壬午の夏 台棋泉州を

發しあひ大和路より宇治を経く江州信樂に入せ賜ふ此時
多羅尾四郎右衛門といふ者の宅に舍らせし頃あり
此像と獻を多羅尾家譜より左京進光俊初く多羅尾と号し
光郷江州信樂と號す云く多羅尾四郎左衛門は其節同國磯尾村の
あし四郎兵衛光郷入道道賀のりなり
沙門神證とあを供せし此靈像を持して東國に赴き
雨より 御出陣毎ハ神證とく此勝軍地藏尊と祈念
せし遂ハ慶長八年癸卯の夏 台命より同庚
子年石川六郎左衛門尉當山を關き假ハ堂宇を造建し
あひ其後同十五年庚戌本社を始悉く御建立元和三
丁巳同國豐島郡王子邑に於て白石の社領を附しあひ
とわつと 惣鹿子といふ冊子に此地ハ元櫻田の村氏内藤六郎といふ人の
修せし地也山後征伐あり沙門春音慶長庚子の御出陣ハ勝軍の法を
慶長八年九月廿四日貴賤の赤詣を許さるあり江戶名勝志同所あり
又爰ハ山城の愛宕と遠州鳴子城ハ勸清の家臣都築某といふ人の勸誘あり

愛宕山田福寺毘沙門の使ハ毎歳正月
 三日小修行の女坂の上愛宕とて
 若肆のあつて四例を勤む
 この日寺主と始とて支院ありも
 出頭して其次第あり座を儲け
 強飯を食ふと半お至る頃此毘沙門
 の使と称する者麻上下と着
 長さ太刀を佩雷槌を差添又
 大なる飯の杖を突初春の
 飾り物にて衆を造り是を冠
 相隨ふりの三人共本殿より
 男坂を下り田福寺
 小入て此席お至り
 組机ありてイ
 飯をとりて三度
 魚板をつきさ
 して曰
 まうり出る
 者ハ毘沙門太
 の使院家後者
 をいやす中の
 面々長屋の
 所化も勝すの



諸役人
 至る迄
 新八
 九杯古
 糸七杯
 飲を
 まく
 おや
 らん
 うつて此
 拘子を以て
 返答いん
 時其一膳
 りの答て曰吉
 のありま
 もるま
 云々あり
 毘沙門の使
 兵衛とて
 あつてい
 本殿へ
 立ぬ



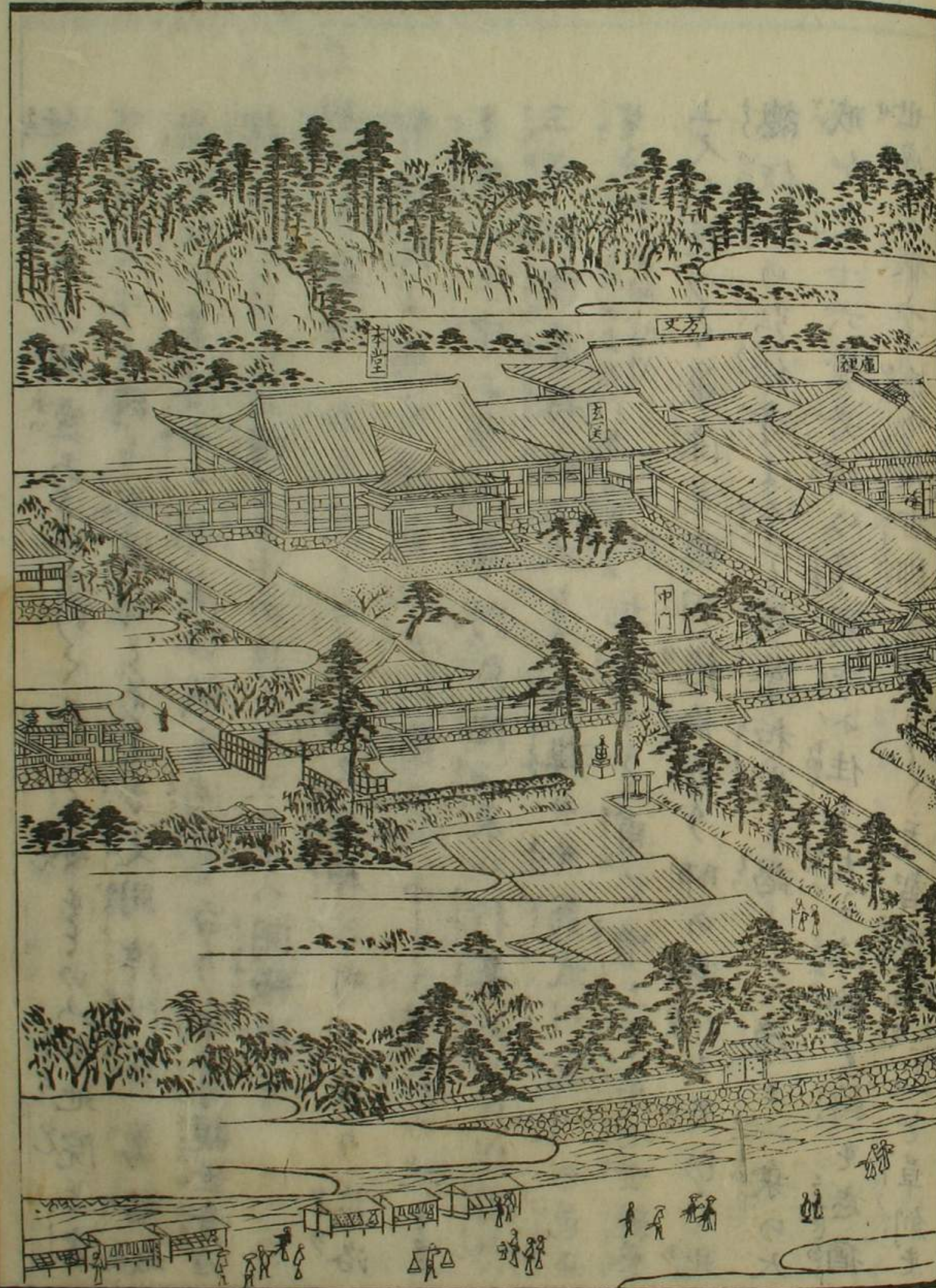
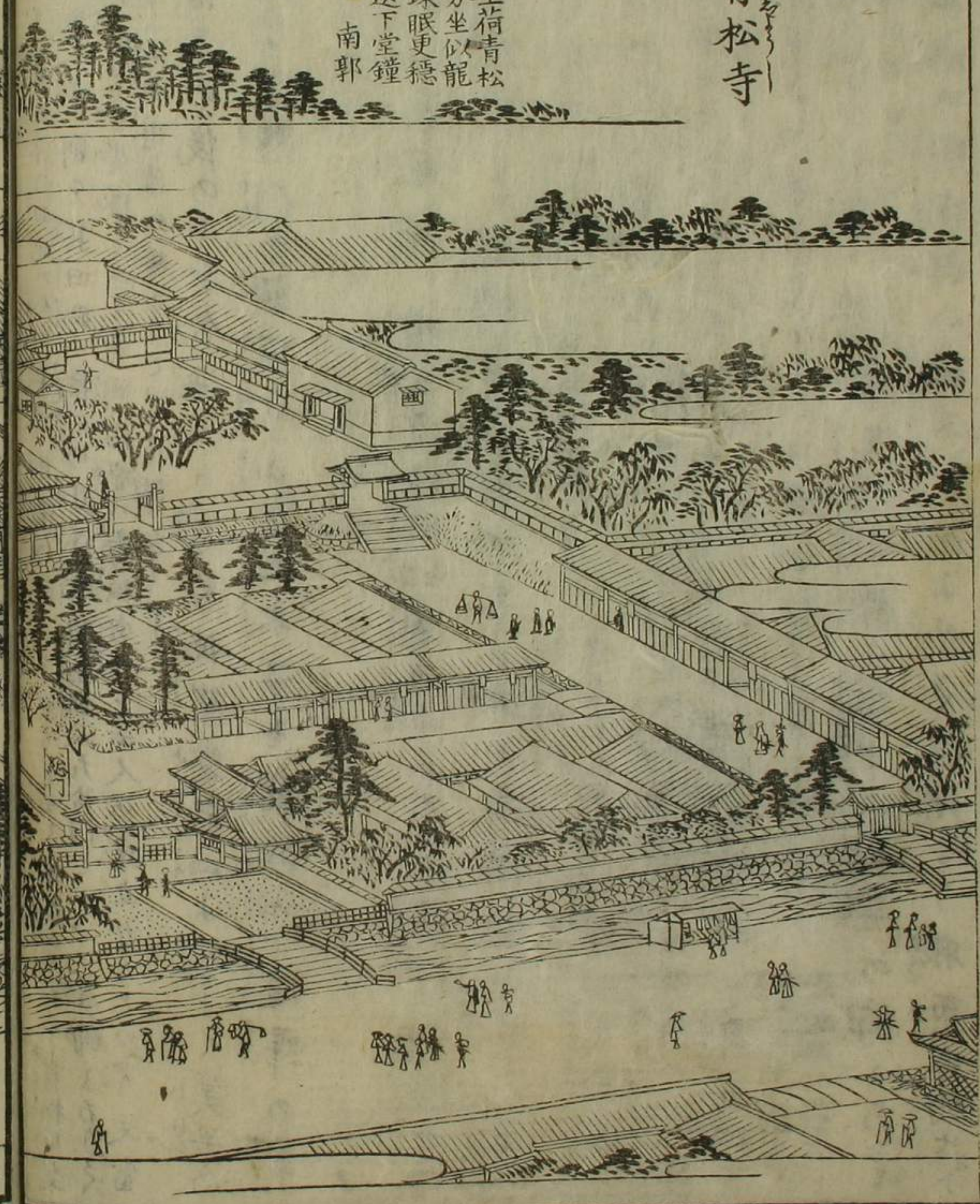
とあり此説福寺云はつるなり澄とて此山の主神ハ毘沙門天なり
今も此社の相殿ハ安置を毎歳正月三日毘沙門の御と稱する舊社の式あり其式画上下
より按は當寺開山俊賢師ハ始野州よりあり野州にありけるの強飯の式ありて世に所謂
日光の古式ハ准ふ當寺は行方のも恐らくハ俊賢上人より始るなり故
抑當山ハ懸岸壁立し空を凌ぎ六十八級の石階ハ疊くこと
雲と挿ぐちく聳然り山頂ハ松柏鬱茂し夏日とて
あや登るとハ涼風凜々として炎暑をよそ見落せ
三條九陌の万戸千門ハ夢をつづく所せく海水ハ渺焉と
ゆづりける千里の風光と貯へ尤美景の地なり月を以て世買ハ
得日と稱し参詣多くとりて六月廿四日ハ千日と号
けく貴賤の群参指麻の如し
萬年山青松寺 同南隣る曹洞派の禪刹あり江戶
三箇寺の一員なり本寺ハ釋迦如来関山と雲崗俊徳大
和尚より文明年間太田左衛門佐持資草創を初と貝
塚の地よりと後或云天正此地は遷る
青松寺と稱せり

一ハ青松寺の旧地ハ今の平川馬場の南の方なりと云く南向亭云く青松甲斐
と云人草創を其旧跡ハ松町の貝塚當時王虫八右衛門と云る屋鋪あり
彼墓と甲斐塚と云と菊岡治涼ハ青松宮内と云人の建立なりと云り又當
寺ハ太田道灌の塚ありと云ハ詳なり
當寺の後の山を合海山と号く眺望愛宕山は等しく美景の
地なり惣門の額万年山の三太字を関沙門道霈の筆

勝林山金地院 増上寺の西切通の上にある京師南禪寺の
塔頭中々南禪寺は宿寺なり五山の僧録と稱を本寺ハ
唐佛の聖觀世音菩薩なり
或人云宋人陳和卿が作なりといふ
毎月十八日觀音懺法修し
関山を大業和尚と云其頃碩學なり五山の僧録司は余せしむ
都留の毛衣と云草紙は古ハ寺社裁許のり金地院境内は青葉楓と
稱する古木あり今ハ焼亡ひくなりやといふ
此木も昔當寺
所城内あり
頃物より後此地へ関魔王ハ石像ハ塔中ニ玄庵の前より
宝永の頃南部の領主靈尔は依る彼地より麻布の別荘

青松寺

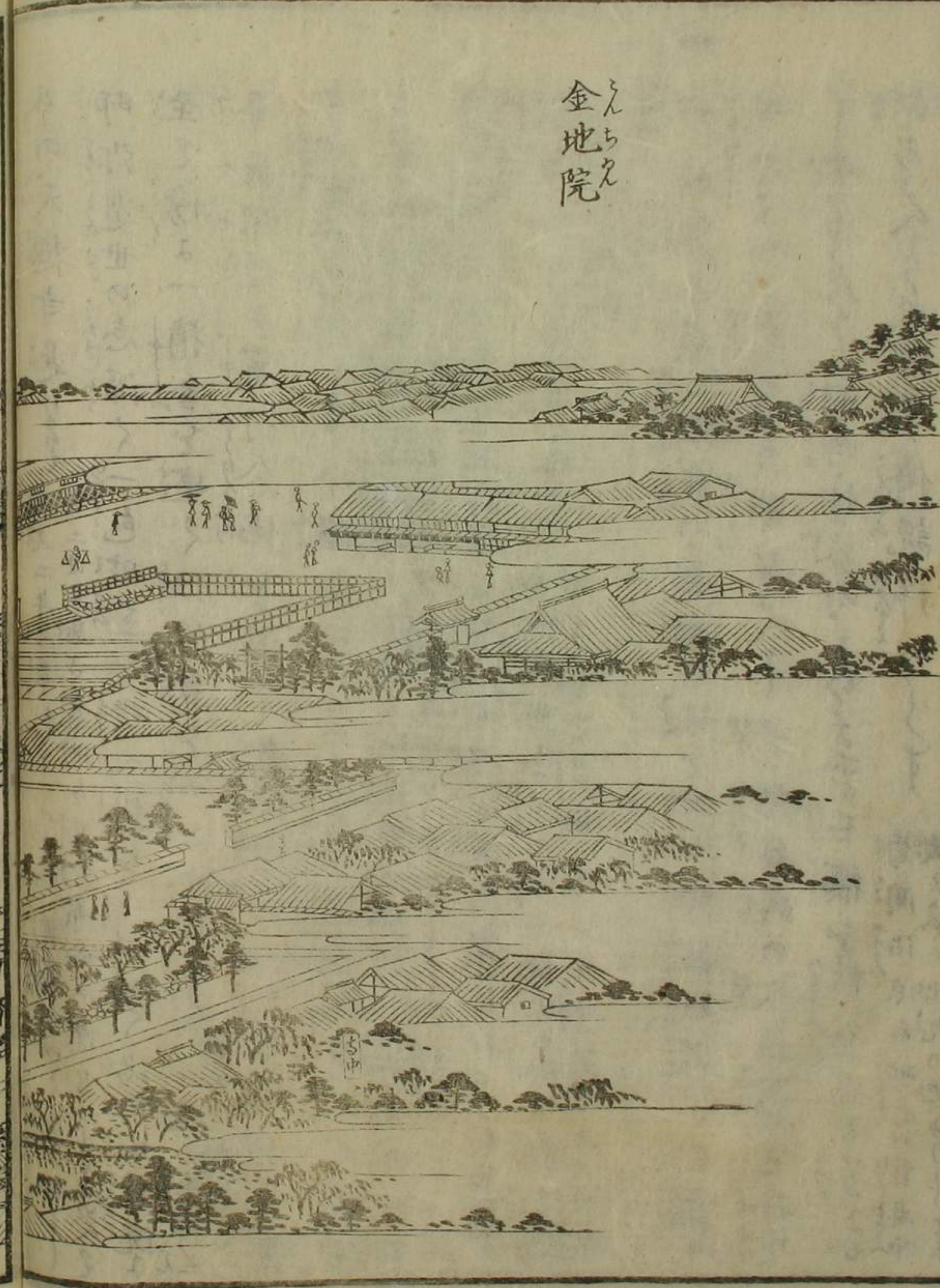
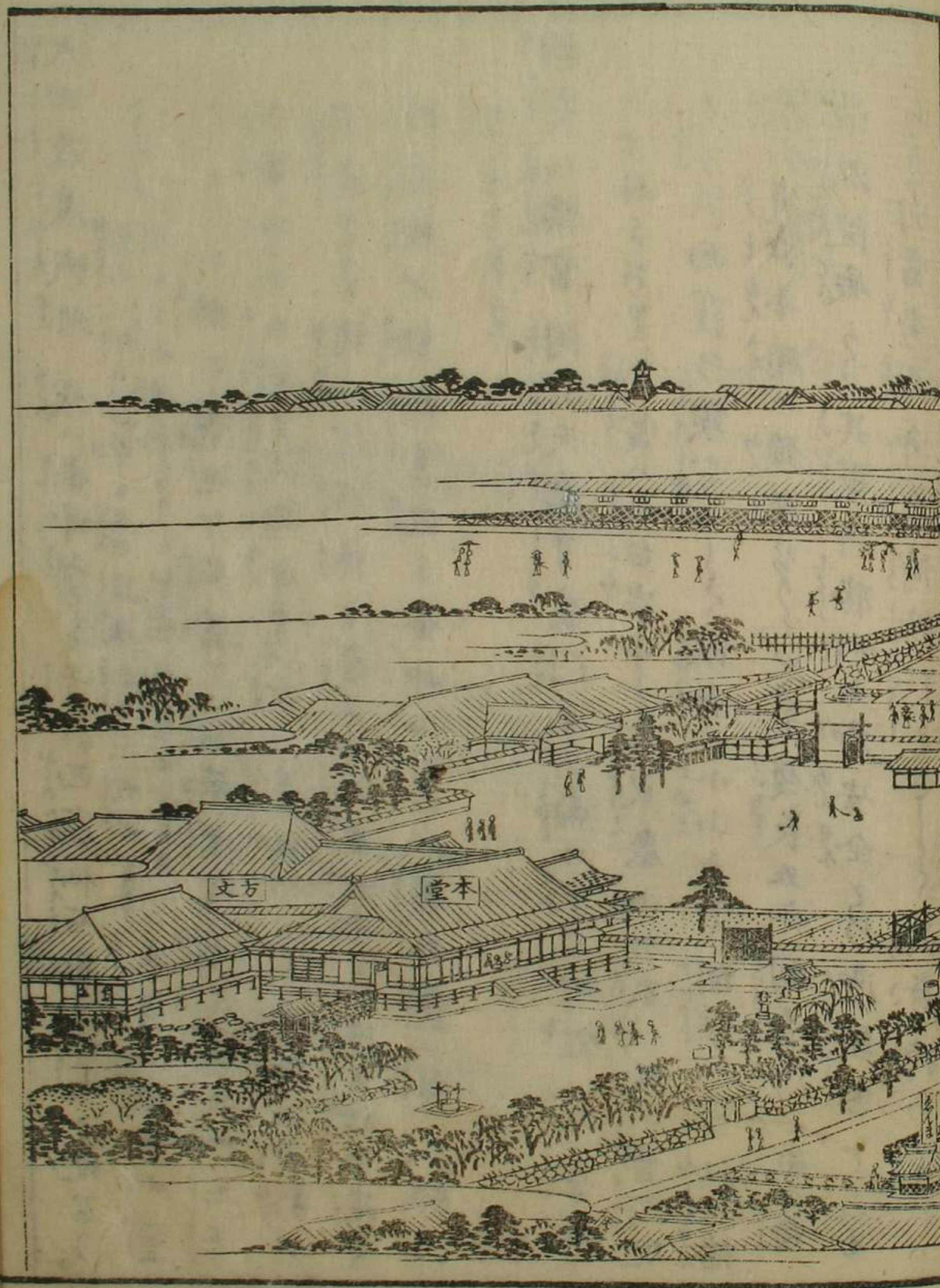
萬年山上荷青松
盤結高分坐似龍
知是抱珠眠更穩
彩雲飛送下堂鐘
南郭



延され再び威靈あるふりなり又るふ安きなり金地院と書
せし三大字の額を水雲寫とあり方丈同津溟筆薦福殿
岩元雄の書塔中二玄庵の額も同筆なり本尊觀世音の
像ハ大の月三月續々中の月の十八日ふの開帳あり

光明山天徳寺 和合院と号し西久保神谷町にあり花洛
智恩院は属し浄家江戸四箇の一なり紫衣の地なり
支院十七字あり本尊阿弥陀如来ハ行基大士の作開六
三蓮社縁譽称念上人なり師諱ハ吟翁武州品川の邑小
生母ハ藤田左衛門尉道昭と云九歳より甫て増上寺第七世親譽
上人は從つゝ難波を聰明絶倫なり師の遷化は及び北
總飯沼の弘経寺に至り鎮譽和尚は謁し浄土一衆の大
戒を受十六歳岩附の浄國寺に住し大は法輪を轉し志猶
世塵を厭ふなり後古郷に歸り天智庵或ハ又を草創と

今の天徳寺是なり天徳二年の草創なり先師親譽を以て開山祖と
師弥道世の志深く一包破笠を携へ錫を荷ひく治の知恩院に
至り傍に一精舎を建ち住し是を一心院と号し一院ハ念佛三
昼夜不退し常行念佛を修し新し念佛三昧の法則を製
し永世の標準とす今諸國厭悠の道場此法式を以て定矩
とす花洛市原野の専称庵上嵯峨の称念寺下嵯峨の正定院挂の極
樂寺田井の會念寺定の念佛寺等と草創を多し此の月
の寺場なり天文廿三年の秋一心院に寂を實し七月十九日
化壽四十一とす今世間用や所の二連數珠も師の製する
此念珠を用ひ中々是を貫輪とす佛号を唱ふの後
城山西窪土岐山城侯の藩邸の辺を云土俗熊谷次郎直實の
城跡といひ傳ふる誤なり一昔熊谷氏の人此居宅杯を
一地なりなり同所神谷町にあり石橋を熊谷橋と号す
故あるなりと今傳説詳なり菊岡治涼云此所ハ昔麻布

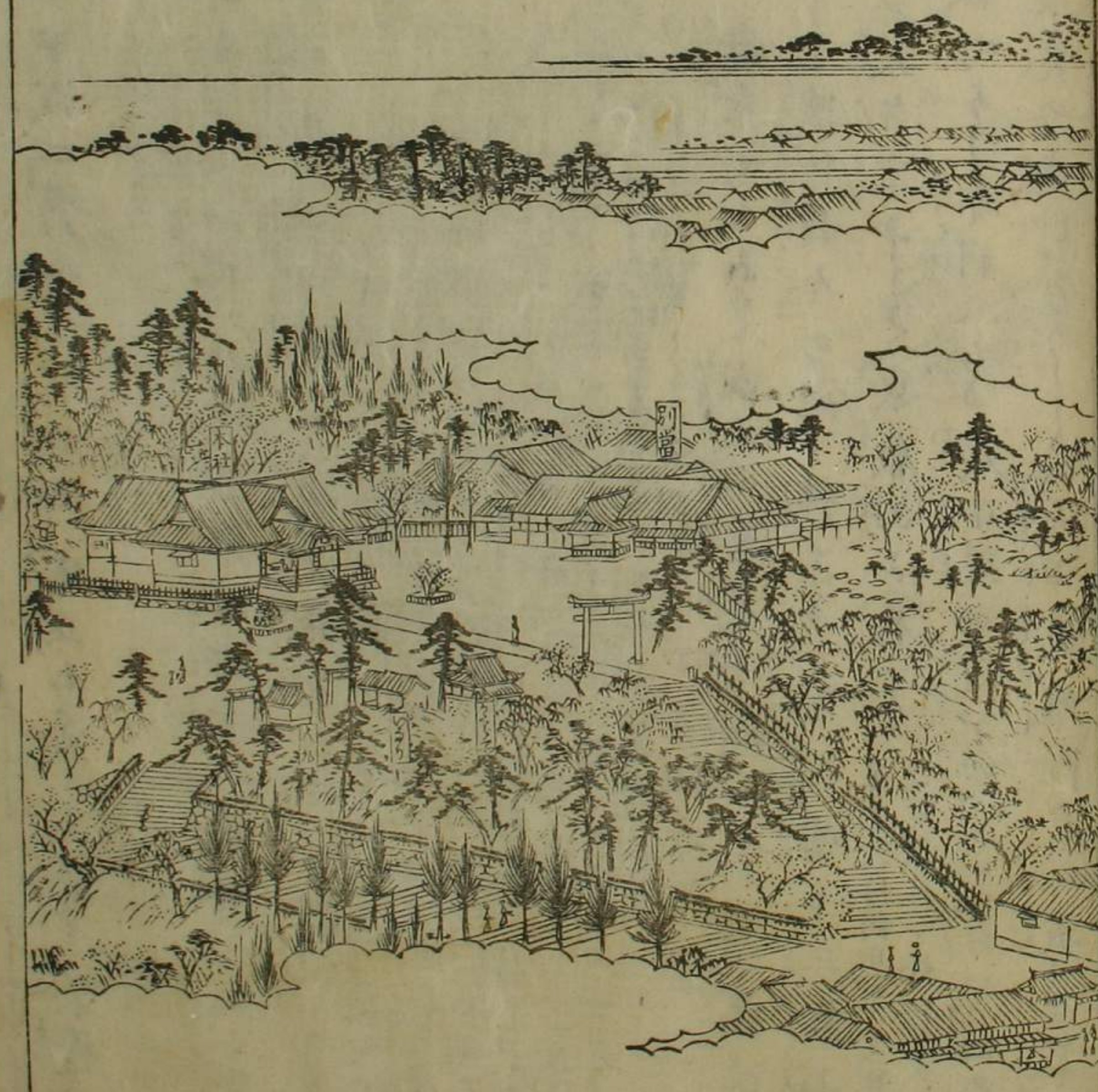


金地院
えんちえん

太田道灌城跡 或ハ番神山と号ス西窪仙石家弟宅の地なり
 今ハ土取場なりと云ク又昔此地ハ小堂
 あり土佛の釋迦を安置シ法華堂と号ク後豆州玉澤
 法華寺の日朗上人持念する所の墨画の三十番神の画影と
 携来ス諸人を结缘セ然ル小田原北条氏後ハ社を建テ
 彼番神を勧請ス故ニ番神山と云ク其画像ハ後京師に
 移セト云々

西窪八幡宮 同所天徳寺裏門より南の方三町程飯倉町
 一丁目より別當ハ天台宗中々東叡山の末八幡山普門院
 と号シ西窪の鎮守中々旅所ハ小山あり相傳ハ當社ハ幡
 宮ハ寛弘年間の鎮座なりと云ク慶長五年関原一戦の時
 崇源院殿より其軍師勝利と御安全との御願書とあり
 別當秀圓御祈禱修修と云々其奇特ありと云々

西久保八幡宮



寛永十一年甲戌二月終に宮社御建立ありとて祭禮ハ

毎歲八月十五日なり

飯倉 西窪の南を云此地ハ往古伊勢太神宮の神厨の地とて

故に其所饌料の稻と収め倉を飯倉と唱へり

地名と呼ぶるなり

地を領せし北条家の所領に飯倉彈正忠太田新六郎鳥津孫四郎が此

所の北条家より遠山太夫政景元龜二年江戸あり五十五貫六百八十五文

の地を飯倉に寄附せし地なりとて飯倉の地名あり此中三貫三百文ハ以前より

熊野権現宮 飯倉町あり或人云養老年間芝の海濱に

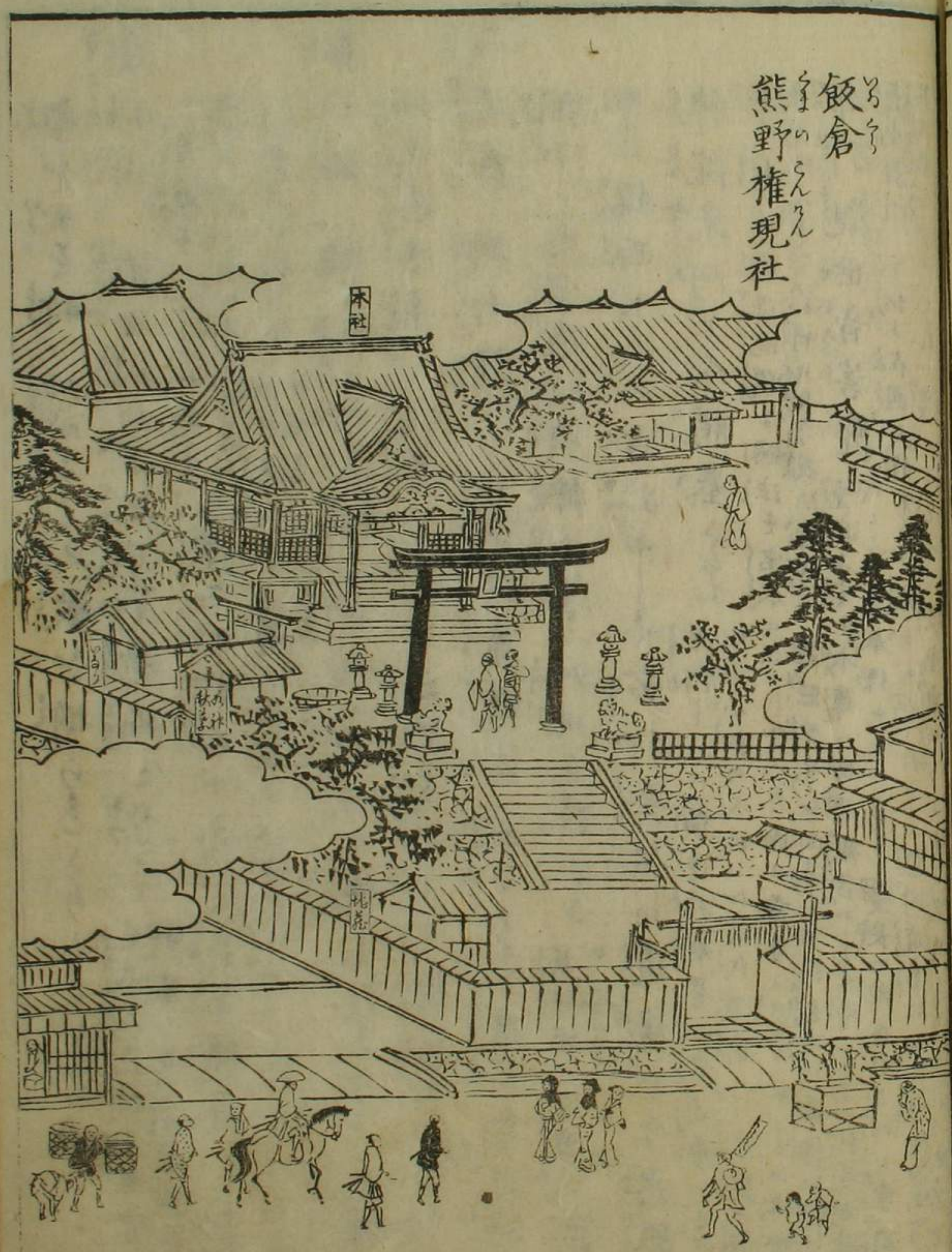
勸請ありとて遙の後今の地に移るとも別當者三集山

正宮寺といふ天台宗より東叡山に属せり

勝手原 土器町より赤羽へける廣小路の辺といふを昔ハ三田の

方へりける廣寛の原野なり

飯倉
熊野権現社



勢と出の時、此所より人数を揃らしめり

赤羽川 流谷川の下流なり新堀と号く延宝江戸國は麻布新堀とあり元禄間板

此河の上赤羽の池と云ふ元禄の始釣命小あつて是と堀ら

赤羽橋 同一流に架を按は赤羽ハ赤埴の轉したるなり人欣

此辺茶店多く河原の北あり毎朝有市立て繁昌の地あり

心光院 同所橋より北の河原道より右あり増上寺此別

院より宝曆の頃移山より此地に移る其旧地ハ俣野門當

寺ハ鎮西上人の古蹟あり常行念佛の道場なり惠照

律院光阿上人開基光阿上人ハ横連社衆心若頑夢と号し如川小松の人姓ハ如波氏越前浄光院の隨

布引觀世音菩薩境内ハ安んず本尊ハ馬頭觀音なり慶長の時丹羽が所長なり

長重興川一木松ハ在國の時下城下ハ長重興川ハ在國の時下城下ハ長重興川ハ在國の時

道者唱ふ終ハ大將軍家へ献せしと追せり布引と倉せり其後又

西方よりハ彼馬驚き増上寺境に埋めり石塔を建し其後又

件石塔を本尊として馬及觀音は崇むるなり宝曆の頃寺と共に此地へ

引れり

竹女水盤 新著聞集云江戸大徳馬町佐久間勘解由召仕の下女たけハ

水盤の角細と置く洗ひ流しの飯とけ其溜りしめと身ハ

常は稱名急るなり後ハ大住生を遂ししなり彼竹女ハ常は細とめて置

水盤ハ今増上寺念佛堂心光院の門の天井に掛るなり其件の水盤より光

明を放ちしなり當寺の縁起の中ニ詳なり

芝浦 本芝町の東の海濱を以芝口新橋より南田町の遠近に

惣名なり上古ハ芝と竹柴の郷といひ後世上略して柴

この呼來し又文字も芝を書改りしなり更級日記は竹柴の郷といふなり

猶三田海寺の茶下は詳なり南向亭云芝といハ彼地の古名なり海岸

也き所ハ柴と建海苔のやうなり此説是なり海苔をとり元禄草の辺の

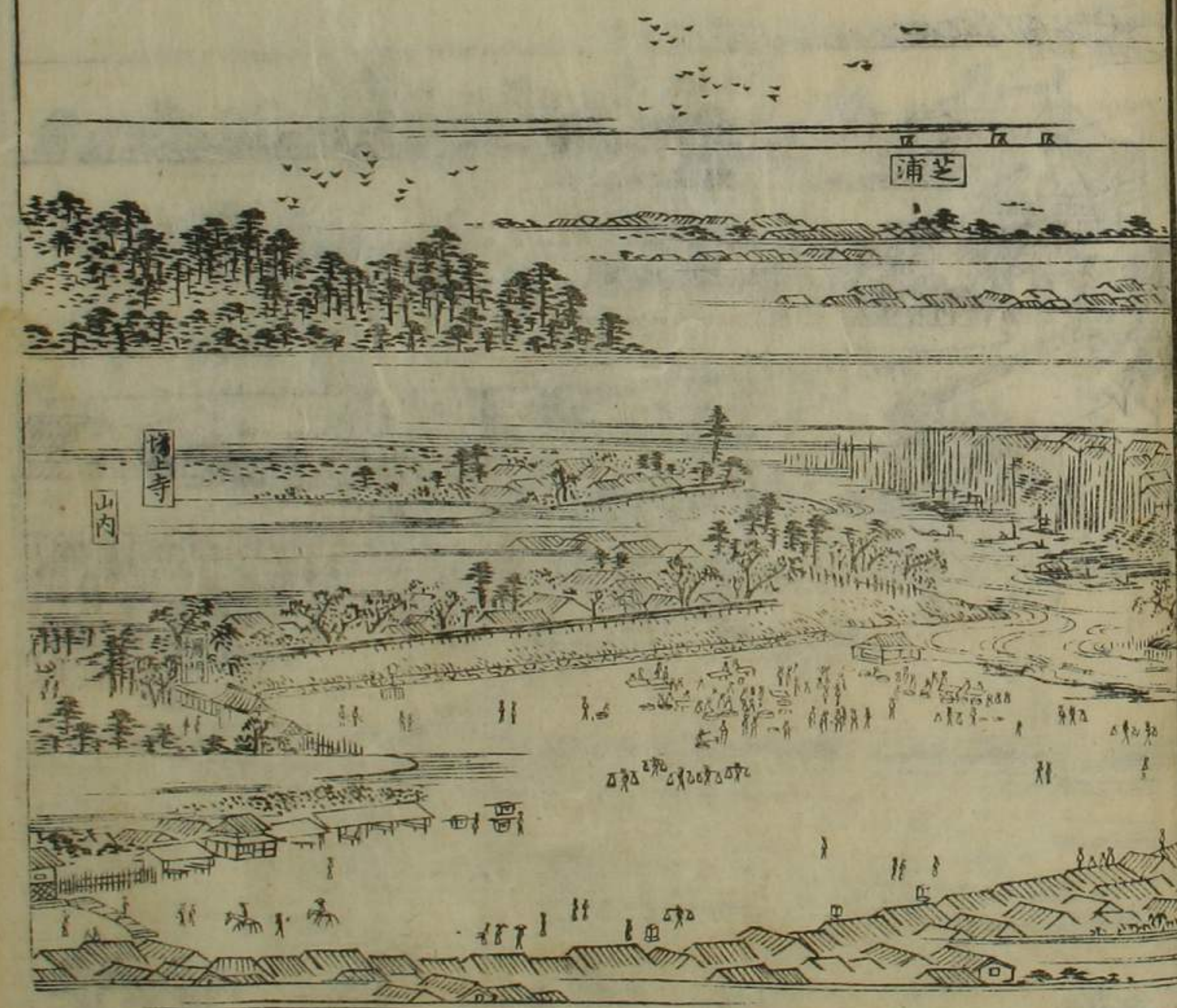
後芝ハ改作なりと云く按は此説是なり海苔をとり元禄草の辺の

此地と雜魚場と号け漁獵の地なり此海より産するを芝

肴と称し都下ハ賞せり

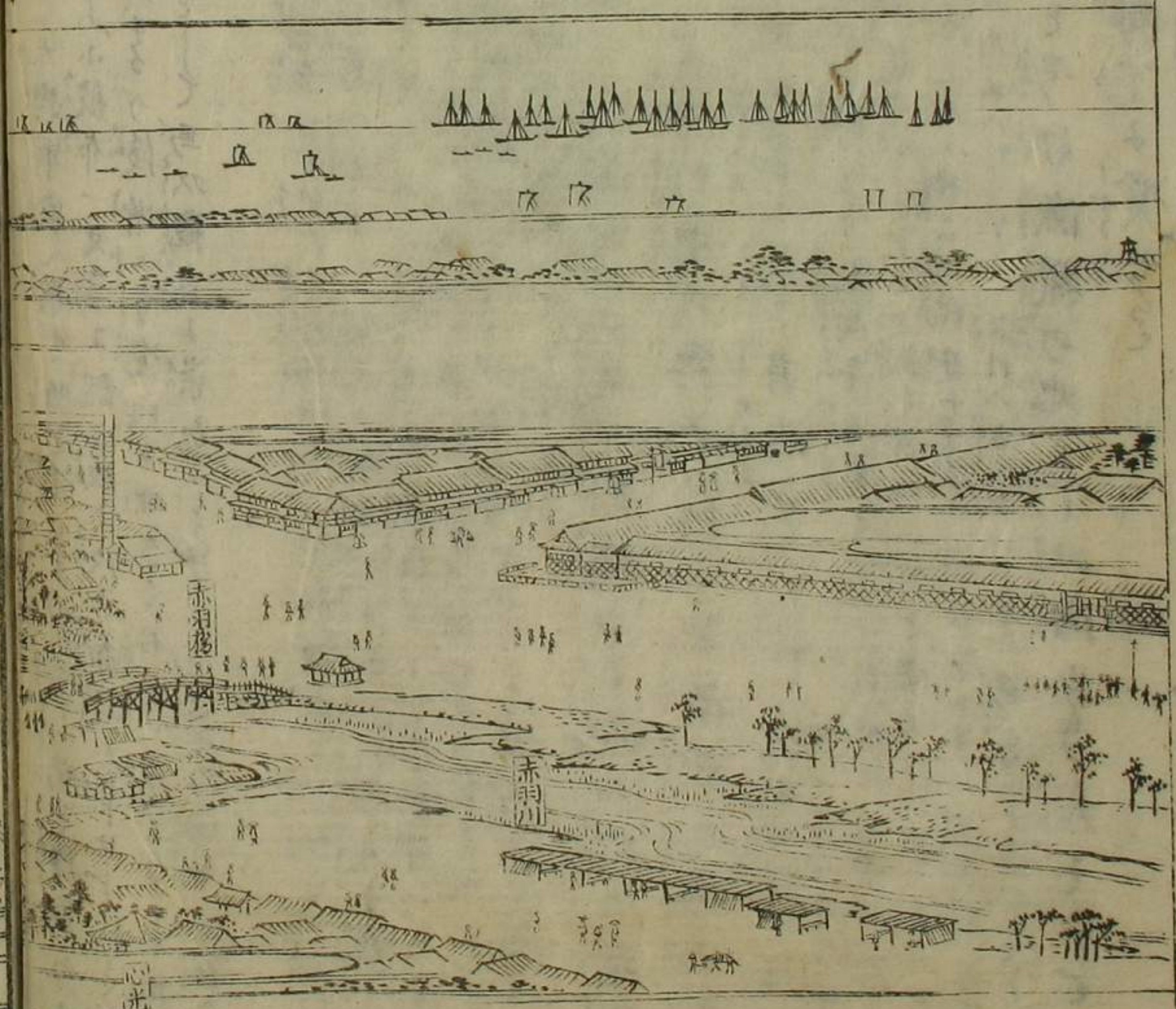
丹鳳城南赤羽濱
 郊天晴近五雲新
 芝山樹擁銀臺色
 麻谷流侵碧海春
 客裡攜家羞白髮
 人間此地避紅塵
 少年車馬休相汚
 沐罷聊裁頭上巾

南郭



山内

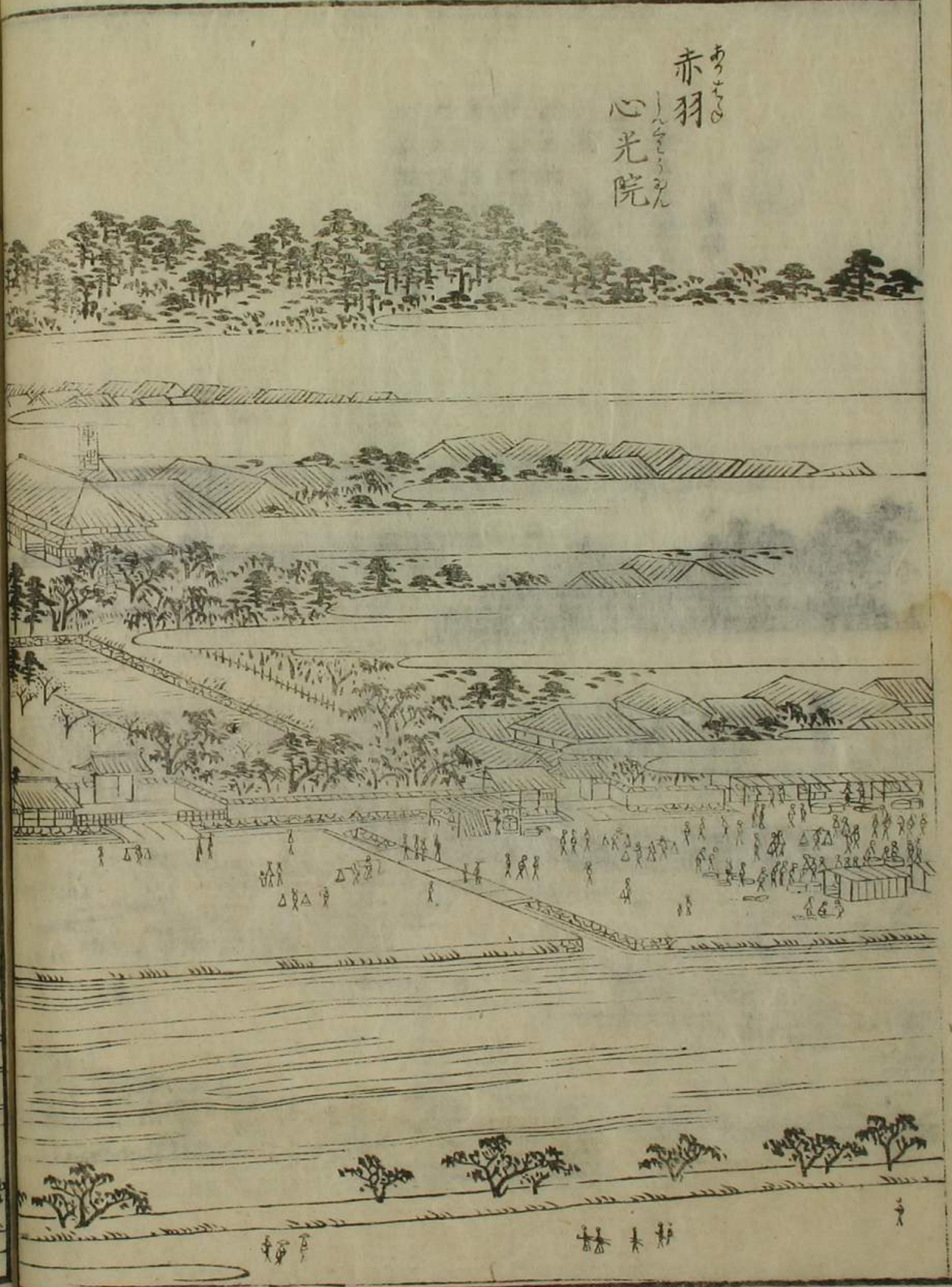
赤羽



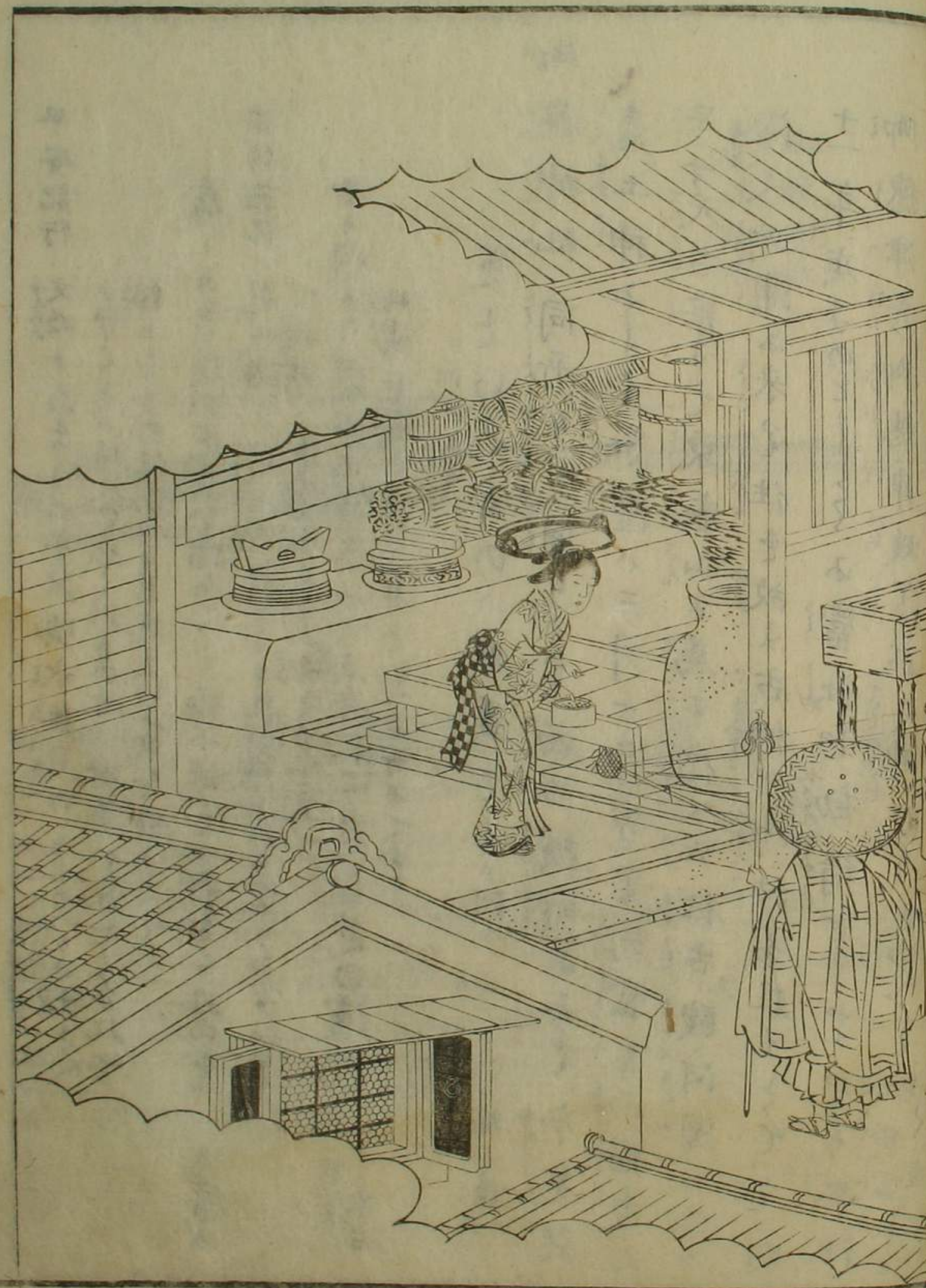
心光院



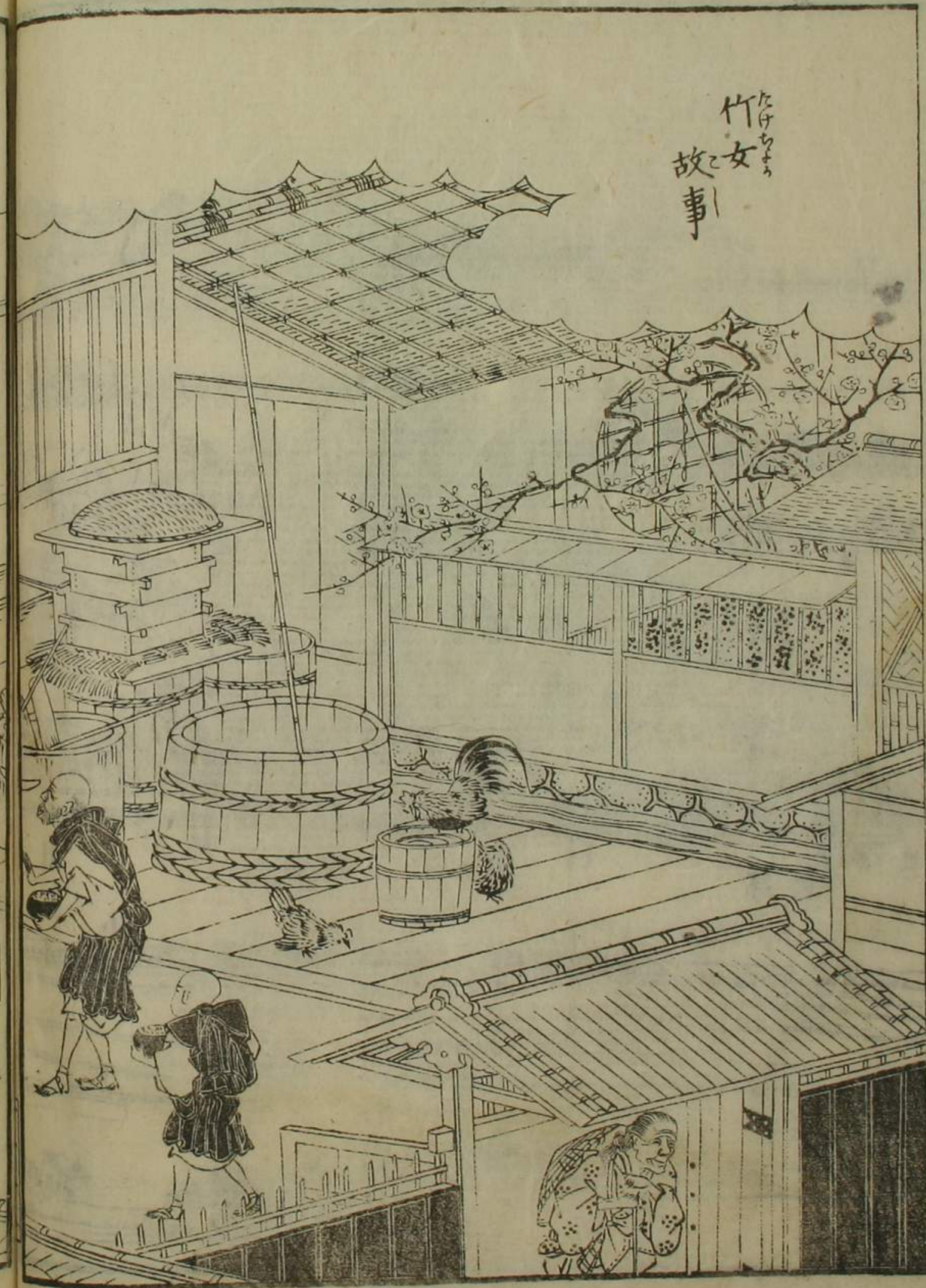
赤羽川



赤羽
心光院



竹女
故事



平安記行

文政十あより二年は頃水無月のなつと土さく
さけくとう旅人のぬしけりせ避暑の床をさるれて
都ふまうのほりね中畧芝といふ所を過るとて

露一々さ道の芝生と踏ちりし駒ふ任まらあきられの免

太田道准

田國雜記

芝の浦といへる所ありしれは塩屋のなかりちなひさ
て物淋しきふ塩木をふ舟とりを見て

やうねうり藻汐の煙名を立舟にこりつひ芝の浦人

道與 准后

此浦を過るあり井といへる所めて云々

江戸めて

芝といふもの候夏さしに

梅翁

御徳神社

同所本芝通りより西の横町ふあり本芝北

産土神や々々祭禮ハ三月十五日なり別當を正福寺と

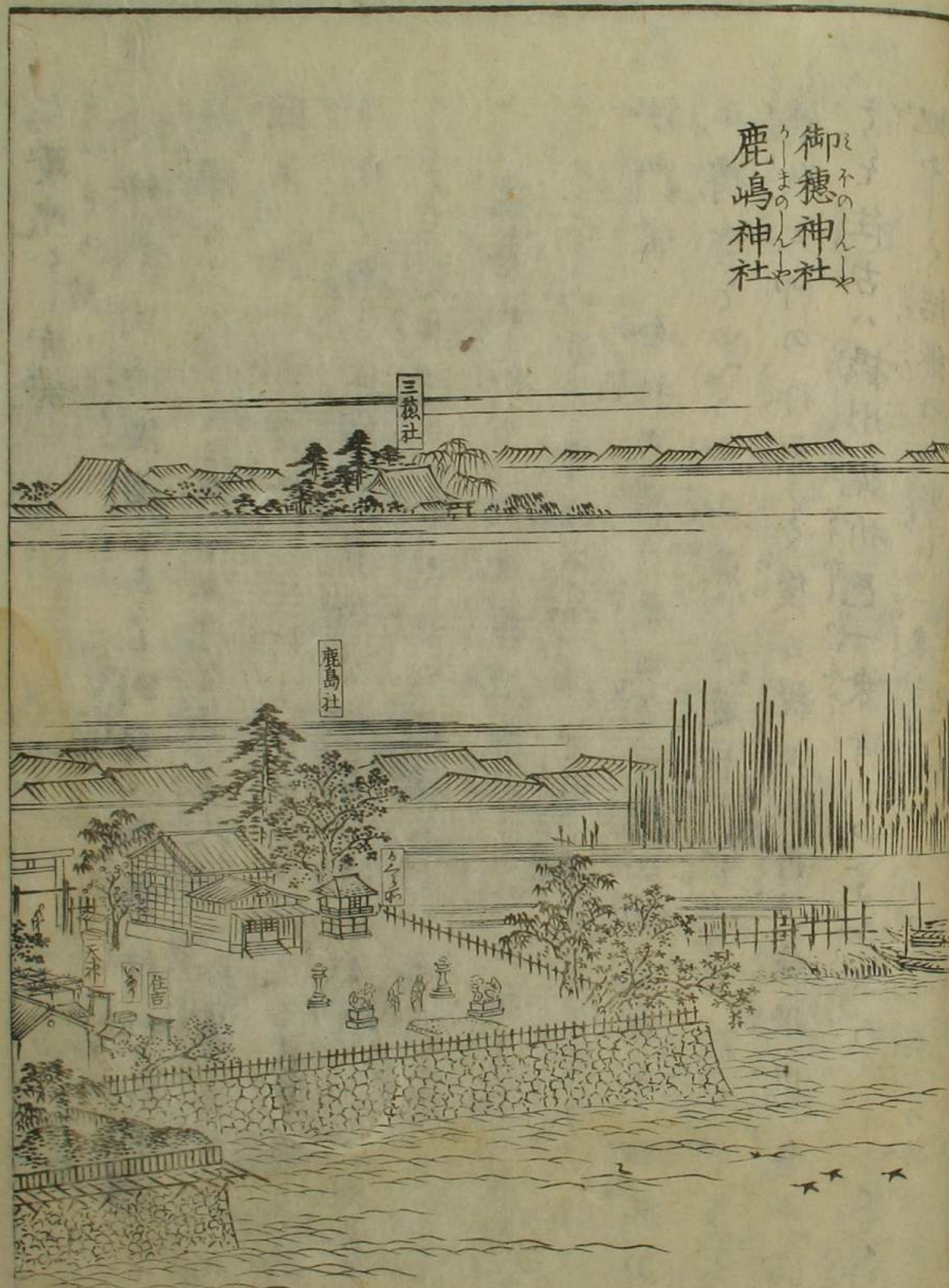
号す天台宗もて東叡山は属を傳へ云往古駿河國三穂の

海人此浦ふ来り住を故は古郷の御神あれとて文明

十二年庚子のとしふ當社を勧請せしやわりの祭神

御徳津彦御徳津媛等ハ二神なりといへる

御徳神社
鹿嶋神社



守護神と祈願

鹿島神社 同所海濱あり別當ハ御穂神社に相同

祭禮も又同く三月十五日なり土人傳へ云寛永年間此

浦一の小祠漂流して汀止るあり漁人こまを揚る其

本所を尋るる常州鹿島大神宮の社地あり小祠あり

又其頃十一面観音の木像同一海汀に流るる

ハ鹿島明神も十一面観音を以て本地佛とせられハ

是れもその當社の御神を勧請せしなり

毘沙門堂 金杉の通り東の方の横小路あり松林山

正傳寺といへる中山派の日蓮宗の寺境あり本堂

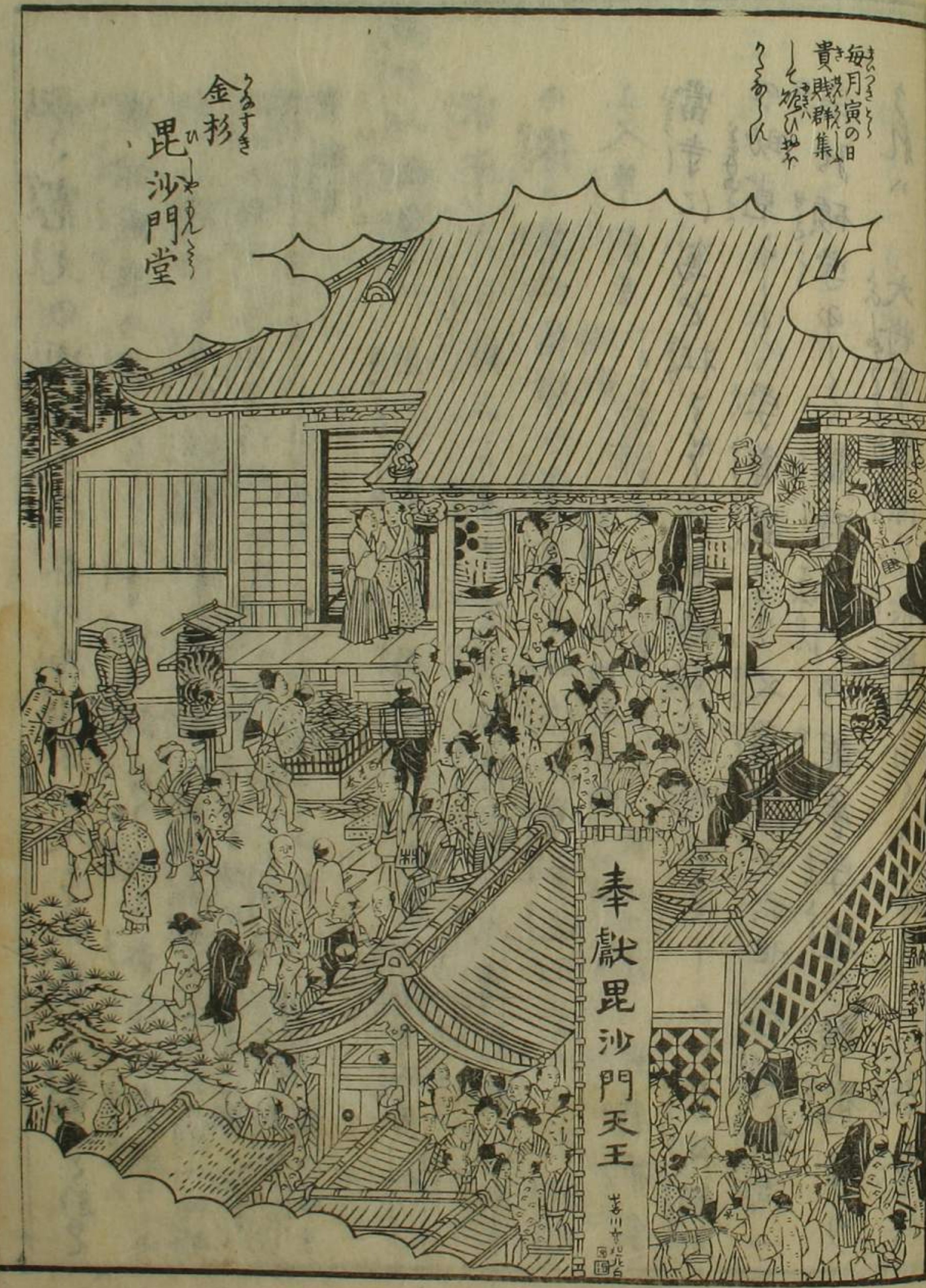
傳教大師の作なり後日親上人再ハ點眼供養せし

とを往古ハ攝州堀折邑一乗寺といへる寺あり

地や結縁の人必一乗寺ハ金仙寺といひ真言の密場なり

毎月寅の日
貴賤群集
しを能ひ地
くあり

金杉
毘沙門堂



奉獻毘沙門天王

依く寛文の頃衆生益の爲目衆上人より移しなるを
靈驗感應の著ききりハ寺記に詳なり故に恭詣の貴賤日々
多く寅日を殊に群集せり正月の寅日恭詣の人大方ハ芝の神明
洛北の鞍馬山の毘沙門天へ正月の寅日詣りて
燈石を買ひ家土産と爲るを奉りてこれに準ずといふ日親堂日親上人の
像を安んず

田中山西應寺 金杉の通より西の裏にあり門前を西應寺と云ふ淨土

宗中より三縁山は属を支院三字より本尊阿弥陀如来

の像ハ慧心僧都の作なりと云傳ハ應安紀元戊申の年明賢

上人草創を明賢上人ハ應永五年戊寅黃鐘
十日遷化を年八十六歳といふ天正の頃 大將軍家

當寺に駕を枉せられ寺領御寄附ありしハ学徒朝夕

の助寛より學道盛なり又當寺十六世存同和尚一

宗此碩學より當時法門の龍象學道の麟鶴なり

これハ 大將軍家深く崇敬よりいふあり 台命に

依く一夏の間法幢を建一百餘人の衆僧ハ宗風の法意を
示すべく念佛三昧他力往生の道へ日々大々弘まり

三田 或ハ御田及び箕多と作ると 古神領に寄りし地を所田
と書る由古老の説なり

和名類聚鈔云 荏原郡御田云云
武藏國風土記殘篇云 荏原郡御田郷或箕多
公穀三百六十七束假粟百三十九丸貢松竹蔵口
等亦有諸禽允大膳或木工寮云云

按此地を渡辺の綱より誤なり或人云此地ハ三田家の
旧領中より三田氏累世に居住を三田家譜に三田三河守其子駿河守
綱勝武州三田に傳へられ綱勝の字を名とし依りて後人渡辺の綱と
混交へて誤る歟と云渡辺系図に云源次充武藏國足立郡箕田
郷に配せりといふあり三田と云ふより三田其田同訓なり故に混雜
てかり附會の流をハまらざるべし 舊筆文集に其田園の
記と号するものあり此地を渡辺綱より誤るなり其文ハ
永禄二年小田原北条家の所領帳に大田新六郎知行三田及間分
樂利分同其輪寺屋分又島津弥七郎知行三田及間分及中村平次左衛門
知三田高福寺が本住坊寺領は同所あり惣領の地等を配せと見
え

綱坂 同所松平隱岐侯と會津家との藩邸の間を寺町へ

小山神明宮



下る坂を号く
 家の藩邸北南の坂を綱う引坂と号く綱う産湯水
 と云ハ同所肥後侯の園中綱う駒繫松と称するハ隠岐侯の
 藩邸綱塚ハ同所功雲寺の境内にあそ

按ニ窪三田ハ綱生山當光寺といふ一向派の寺あり渡辺の綱う守護神ありといふ
 かりといひ綱生山又三田ハ藩邸の神邸とも渡辺の綱う守護神ありといふ
 其畧ニ云く武蔵國在来郡渋谷村其田邑ハ源綱ハ陳田園の記云く
 存を塚上ハ明暦四戊戌の夏會津源公此地を賜ひ別荘とし其
 塚と稱せしむるハ蓋此の勢を取り古の土を尚とて後三田の氣下ハ
 照合せしむるハ

小山神明宮 同所有馬家と黒田家の間小高き所にあり
 神躰ハ雨寶童子別當ハ天台宗不動院と号ハ此所を
 飯倉神明宮の舊地とすハ誤なり

三田
春日明神社



春日明神社 三田一丁目あり別當を三笠山神宮寺と号す

和州三笠山春日四所の御神を鎮座なり

三田の産土神や例祭ハ毎年九月九日修祀を傳へ

云當社ハ村上天皇天德年間武蔵國司藤原正房任國

の頃藤原氏の宗廟なり此御神を此地に勧請せし

むと云なり其後文明の頃法印慶賢中興を本地佛を

十一面觀世音なり弘法大師の彫造なりといふ慶賢瑞

夢より感得の靈佛なりといふ

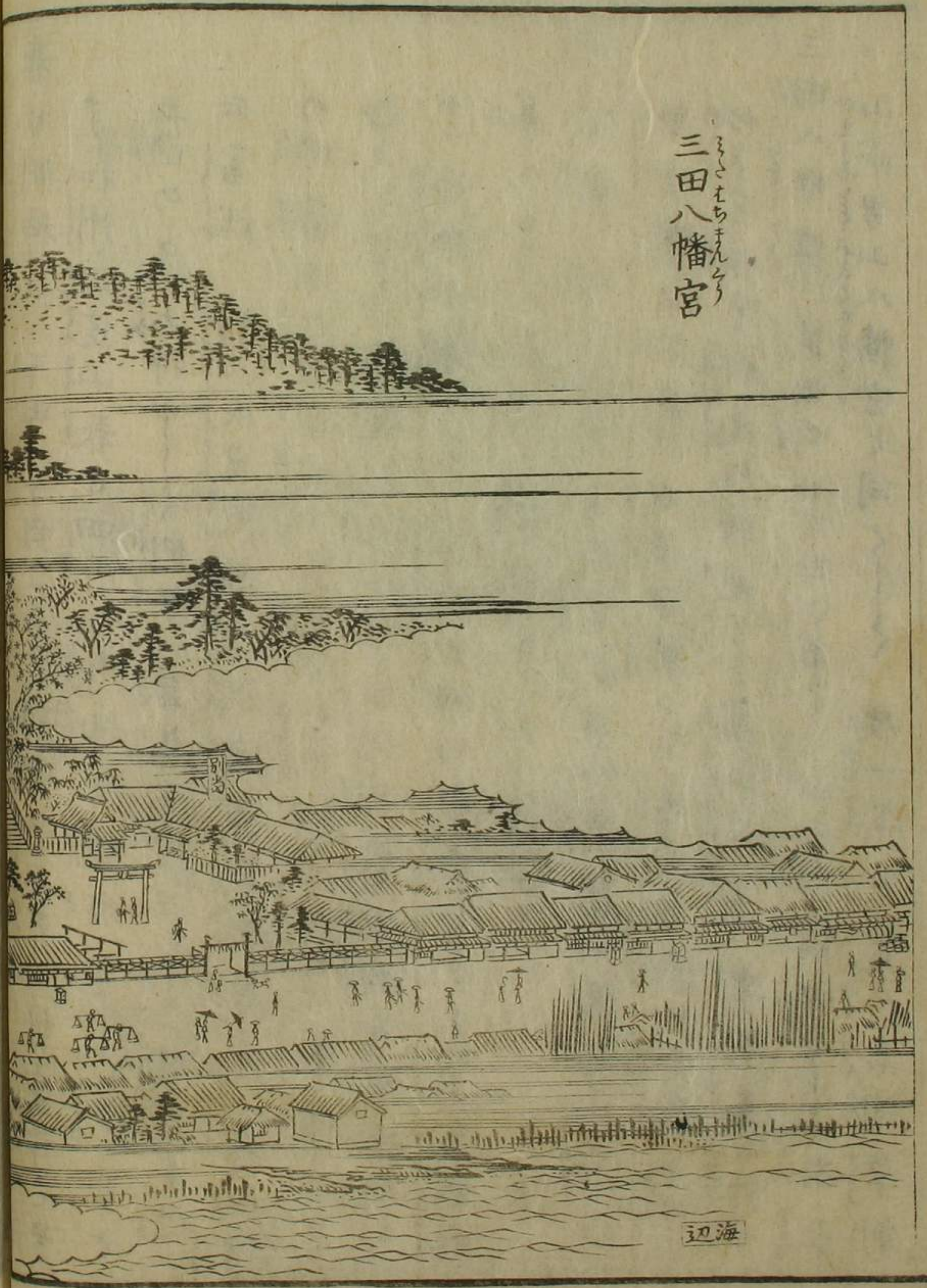
月波樓 同所松平主殿侯別荘の看樓の号なり此地に

眺望實は同庭の風景を縮めて岳陽の大觀を摸し

似しと云依る城南の勝地と云羅山先生の東明集に

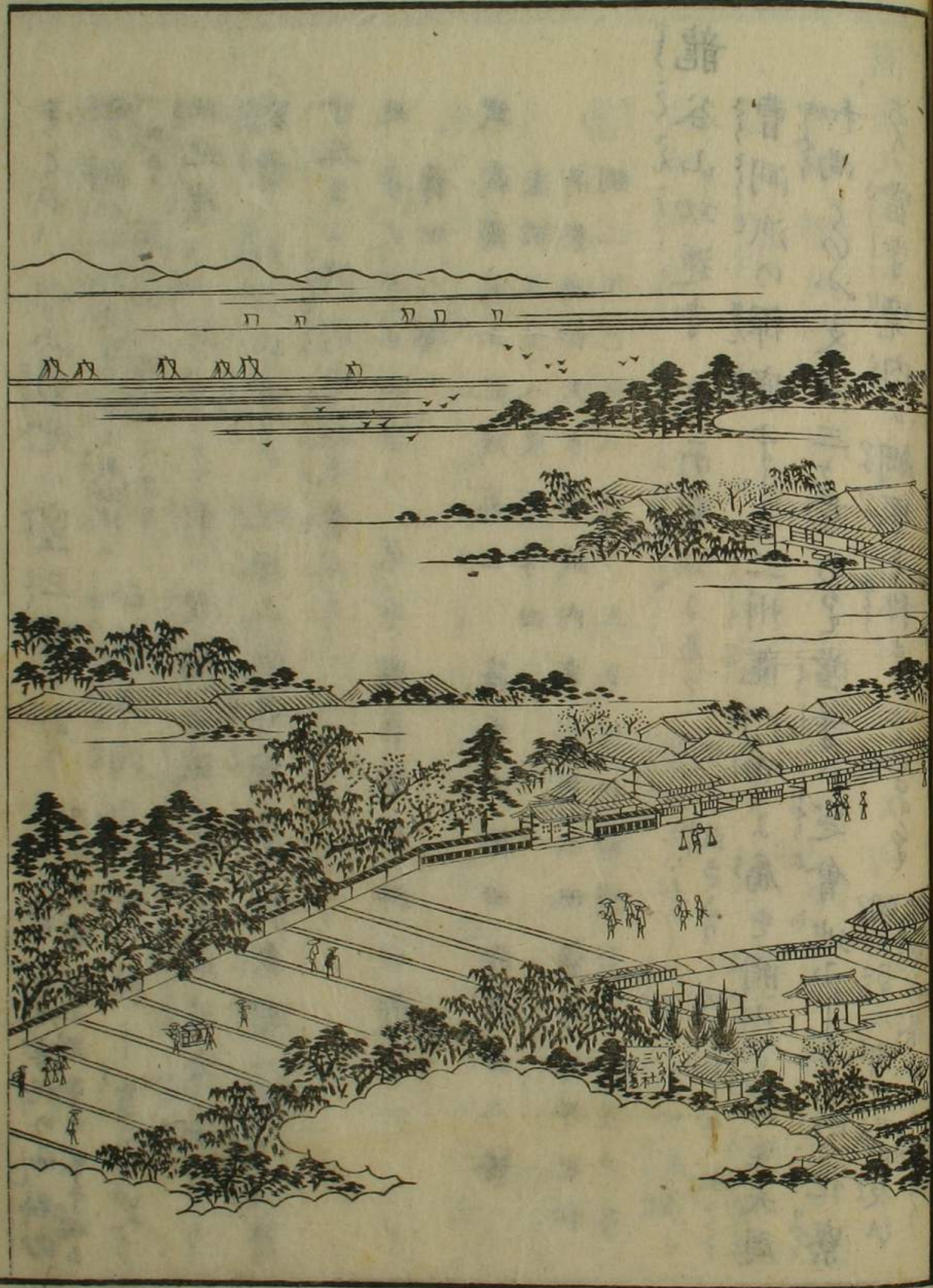
三田八幡宮 芝田町七丁目あり三田の惣鎮守なり祭は

山城男山八幡宮と同一なり後一条帝寛仁年間草創



三田八幡宮

辺海



聖坂
濟海寺
功運寺

まといひ傳の旧地ハ窪三田あり
土人云當社ハ延喜式の神名記
及ひ武蔵國風土記等の書に載る
此の舊田神社是なり其旧地ハ
一社あり窪三田ハ幡宮と稱す
正保年間今の地へ移し
此地後ハ山林ゆゑ前ハ東海ニ臨む
風光秀美なり
別當ハ天台宗中ノ眺海山無量院
と号し祭禮ハ隔年八月十五日
ニ修行を放生會あり
延喜式神名帳云 武蔵國荏原郡御田郷
葬田ハ幡

武蔵國風土記殘篇云 荏原郡御田郷葬田ハ幡

主田五十八束三字田 荏原郡御田郷葬田ハ幡
所祭應神天皇也武内宿禰荒木田襲津彦等也和
銅二年己酉八月十五日始行神禮有神戸巫戸等

龍谷山功運寺 同所聖坂あり
聖坂ハむく此地ハ高野聖多
住く閑きなり坂ありハかく云と

曹洞派の禪窟中ノ三州龍門寺ニ屬ス
閑山を默室天周和尚といふ支院三ヶ寺あり
當寺ハ定會地ナリ所化寮あり
當寺境内ニ綱塚と稱するものあり
綱塚ハ前ノ三田及ひ
堀の糸下ニ詳なり

周光山濟海寺 聖坂の上道ニ左側ニあり
浄土宗ニ

京師智恩院ニ屬ス上古ハ竹柴寺と号ス
巍々たる真言の古刹なり
中古荒廢ニ逮ブ依テ法譽上人念無和尚中興ス
沖ノ庭海岸ニ臨む

當寺庭中の眺望ハ實ニ絶景なり
房總の群山眼下ニあり
雅趣をなす朝夕ニ漂み釣舟ハ沖ニ小く暮々數點の

漁火波を燒くや疑はる羣芳發して緑陰深く風露爽小
一勝地なり月の岬とあり此辺の惣名なり

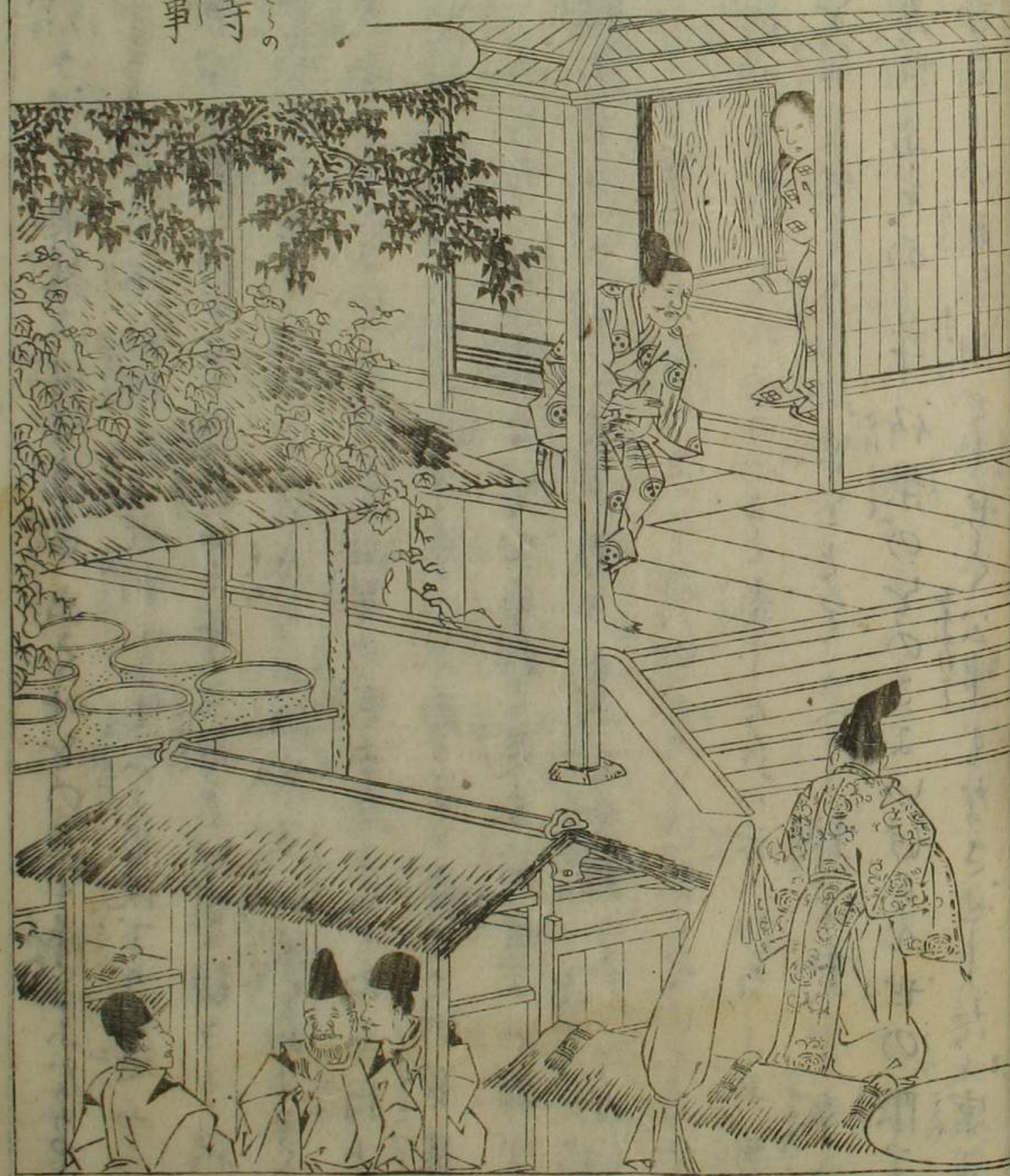
竹柴寺舊址 濟海寺と同隣の土岐侯の邸ニ地其舊跡あり
といひ傳ふ
山岡明阿云按今此地ハ海邊ニあり
岡の上ナレハ更級日記
後ノ記ニありと云

更級日記云
今ヲ武蔵國ヨナリぬ珠ノと云ふ
きりもろもろ
深も砂も

白く波もなぐこひちの様みく紫生と聞野も蘆荻のこ
高く生て馬ふ乗る弓もくる末見えぬと高く生茂りて
中を分行ふ竹柴といふ寺ありて遙はいつさうやといふ
所は樓の跡礎なとありといふ所と問は是といふ人
竹柴といふさうなり國の人ありたるを火焚家乃火
焚衛士よさし奉りたるに御前の庭を掃とく
あやや苦しきとをみるは我國ふ七川三つ造り
居る酒壺ふけり渡りてはわさえの瓢の南風吹は
北は靡さ北風吹は南はなひさ西吹は東は靡さ東
吹は西はあひくを見かくかくあると獨ちつみやと
くはを其時の帝は御むき免いみうかいはうと
そまふ只獨り御簾の際に立出たり柱に寄か
く御覽するふこれとのかく獨りけりや

哀といふなる瓢のいうふ靡なるといみう床く
あはれれりまの御簾と押明くあのをのこあちよれと
めりれりかこまりと高欄のつふ糸りたるまの
云つ事今とかく我ふいひと聞せよと仰られれり
酒壺の更今とくへり申されは我ぬいきて見せよ
さふやうありと仰られれりかこく恐るや思ひ
たれとさふさふやあはれんあひあてまつりて下るふ
便なく人追來らんと思ひく其夜勢多の橋ありと
は此宮を居てまつりて瀬田の橋をひくまをうり
こほちと夫を飛越く此宮はかきあひ奉りて七日
七夜といふ武藏國といふ川きよなり帝后御子
うせぬひねとあはれまといひとあやうなむさしは
國の衛士のものをなんいせかうとさりのを首ふ

竹柴寺
古事



引うけく飛様は逃ると申出さる此をのこを尋るふなりを
論なく本の國ふこを行らわと公を使下りて追ふ
勢田の橋を渡り得行やす三月といふむ
國のきつきて此をのこを尋るふ此御子公使をわ
我さるべきやありらん此男の家よりてぬ行と
いひうわぬ來るいひうわぬあうよく覺ゆこの男罪
しきうせられハ我をいうてあれと是も前世は此國は
跡をさるべきさくせとありなやや歸る公より此
を奏せよと仰らるれハいんうさくそてのあり
御門はかくなんありつと奏しなれハ云うひるハ其男
を罪しても今ハ此宮をとるの都はかく奉る
屋をさるあふ竹柴のものをいけらん世の限を
むさの國を預めせと公事もなさせし宮は

其國あつけ奉らせ賜ふは宣旨下るれハ此家
内裡のこく造りて住せまふりなる家を宮なと
うせむひなれハ寺あなうを竹柴寺といふ
なり云

龜塚

濟海寺の北に隣りて隱岐家の別荘の地はあり
昔ハ竹柴寺の境内なりと中開國の頃地を割る隱岐家の別荘
多し此時龜塚ハ隱岐家の内に入りて其塚のくつは其主の
建られ龜塚の相傳ふ往古竹柴の衛士の宅地は酒壺の
碑と稱するあり其の靈龜栖る後土人崇め神は祀る
いの頃あふらん或時夜も風雨あり其翌日
彼酒壺一堆の石は化せりと云又文明中大田道灌此地ハ
年候を置其龜の靈ありと云河圖と号し
と云今濟海寺の山号を昔ハ龜塚山と唱へし
祖徠先生墓 三田寺町長松寺といふ浄家の境内はあり



魚きまら監ん
觀かん音おん
堂どう



碑文ハ荷蘭侯撰

嗚呼夫東物先生之墓也嗚呼先生之名垂不朽學於古歸道
呼魯博究物理立言之修辭也德崇及無所不照其朦
焉先生出也如日之升也乃影之及無所不照其朦
識矣享保戊申正月十日意九日也其有為卒其行狀弟茂
卿以字行銘曰申先生之墓也乃猷猷維維厚大業已成日
云受乃化弘微猷猷維維厚大業已成日新富運斯人
不壽夭集不斯人永于維維有司列辰嘻我小信瑕能
享神盛德不朽永于維維有司列辰嘻我小信瑕能

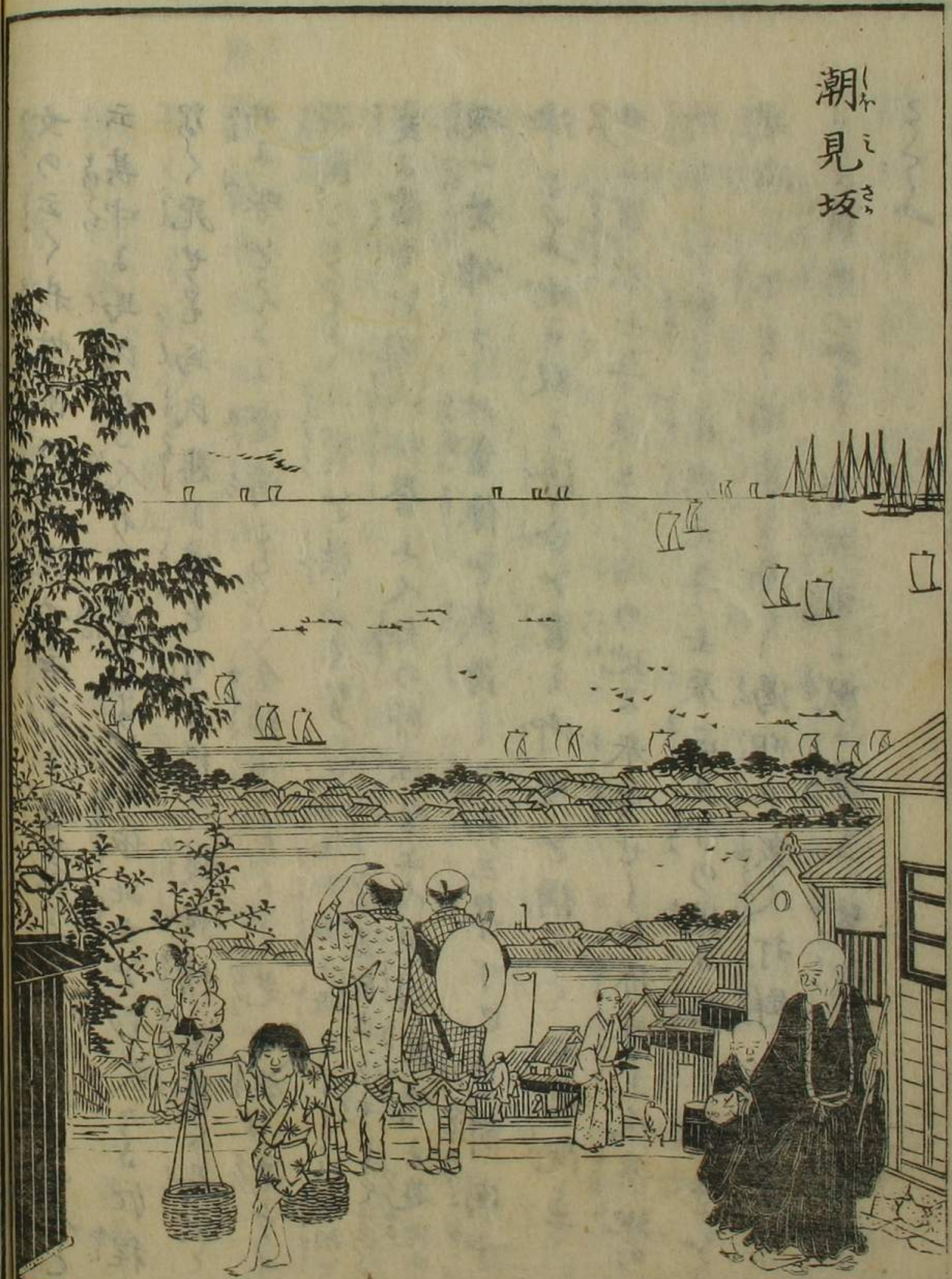
先生ハ我生氏本姓ハ物部名雙松字ハ茂卿字ハ一號ハ護園
通稱ハ惣右衛門云父ハ方庵と号し官医より先生ハ後ハ南總
住五歳ハ文字ヲ識十五歳ハ文ヲ屬家極く貧く東都ハ出
カ學ニ業成リ柳澤侯ノ奉ニ遇ヒ食禄五百石ヲ賜リ編修惣裁
享保十三年戊申正月十九日卒著述ノ書八十餘部と云

魚籃觀音堂 同所淨閑寺とて淨刹ニ安置本尊ハ木像

中々六寸計あり面相唐女とて右の所ニ魚籃を
縁起曰唐元和年間憲宗の金沙灘とて一人の美婦の
籃を持し魚と鬻くあり見る人其容貌の麗しきを競ふ

女の云く我性佛性を悦み若夫と通せし人ありハ夫とせんと
云其中ハ馬氏なる人あり是とて依此女とてわく程
なく死せし馬氏悲し堪む日を経て後異僧来り馬氏と
共ニ塚とるる靈骨とて金鎖なり光を放つ是より
其國こそ三寶を崇めし初金沙灘ハ應化すし妙相ぞ
爰ニ當寺ヲ開山稱譽上人自の師法譽上人肥州長崎ニ遊化の
頃一老婦より此靈像を感得し元和三年丁巳豊前國中
津とて地ニ假し淨舎を營み御座を構へ魚籃院と号し
竟ニ寛永七年庚午三田の地ニ奉安せしと稱譽上人其地の
所せしと歎き承應元年壬辰今この地ニ移し當寺を
建立すふより徂素より渴仰し衆人打群く歩を運ふ
よる靈應の香煙常ニ風ニ靡き梵唄うた林

潮見坂



潮見坂

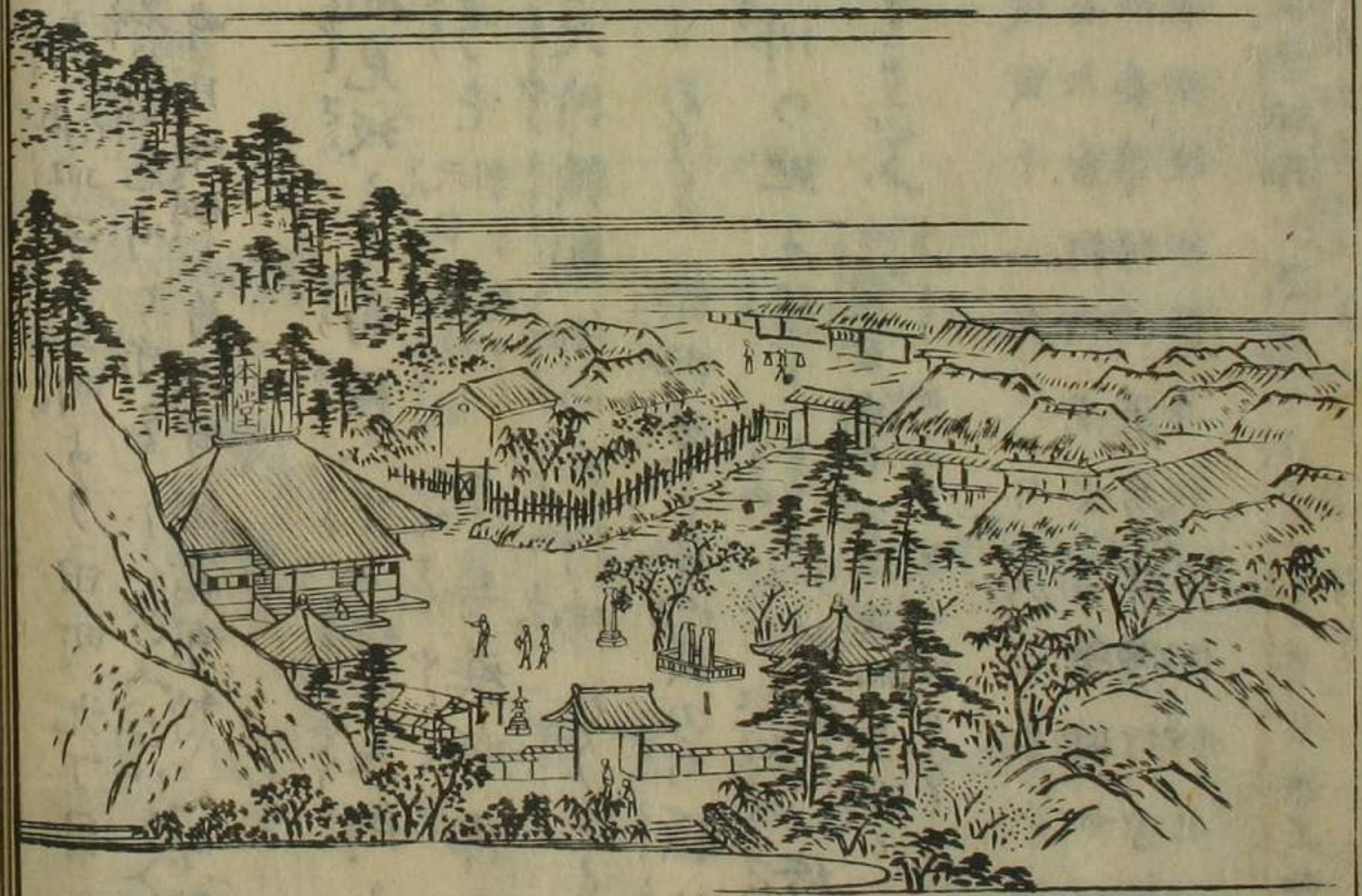
聖坂の南伊皿子臺町より田町九丁目へ下る坂と云ふ
 或人云潮見坂旧名ハ潮見崎と呼ぶ
 合せ七崎

伊皿子薬師堂

潮見坂より高輪へ下る坂の左側にある寺を醫
 王山福昌寺と号す天台宗城琳本尊薬師佛の像ハ智證大
 師の作也右大將頼朝卿の念持佛なりと云ふ往古相州
 鎌倉の佐介谷より薬師堂といふ其の騷乱の時住僧護
 持當國品川の地に移しなむ今其の跡山終ニ寛永年間
 今の地ニ安置せしむ今鎌倉佐介谷は薬師堂跡と
 東鑑曰

建保六年戊寅十二月二日庚子右京北依靈夢所
 令草創給之大倉新御堂安置薬師如來像造慶奉
 今日被達曜堂達願覺房良喜供僧也施主並室家
 阿闍梨遍曜堂達願覺房良喜供僧也施主並室家
 等坐簾中此薬師佛を運慶の作と寺傳智證大師と又東鑑ニ右
 京北とあるハ北条右京大夫義時の所なり

伊豆子
藥師堂



牛小屋

牛町はあり

延宝江戸圖に此地を牛の所と云あり

牛を畜する家多く牛の數

一千疋は餘り

養ふ処の牛額小く其角後より靡きうを敷

覆と号けく上品なり

都々牛ハ行事正しく殊に早一形宛は

精氣挽す力量勝たふ

軛をわき重を乗せく速きに

運入人の用を助る

其功誠は必く古ハ淀鳥羽のそ

ありく都の外あり

牛車なりとふ所入國の頃より許有

りて江府あり

是を用ゆるりとなりとる餘ハ駿河ありのそ

わく唯此三ヶ所は限り

とせ

高輪大木戸

宝永七年庚寅新ハ海道の左右ハ石垣を築せ

ら高札場とわく

其初ハ同所田町四丁目の三辻ハ此地を

江戸の喉口なればあり

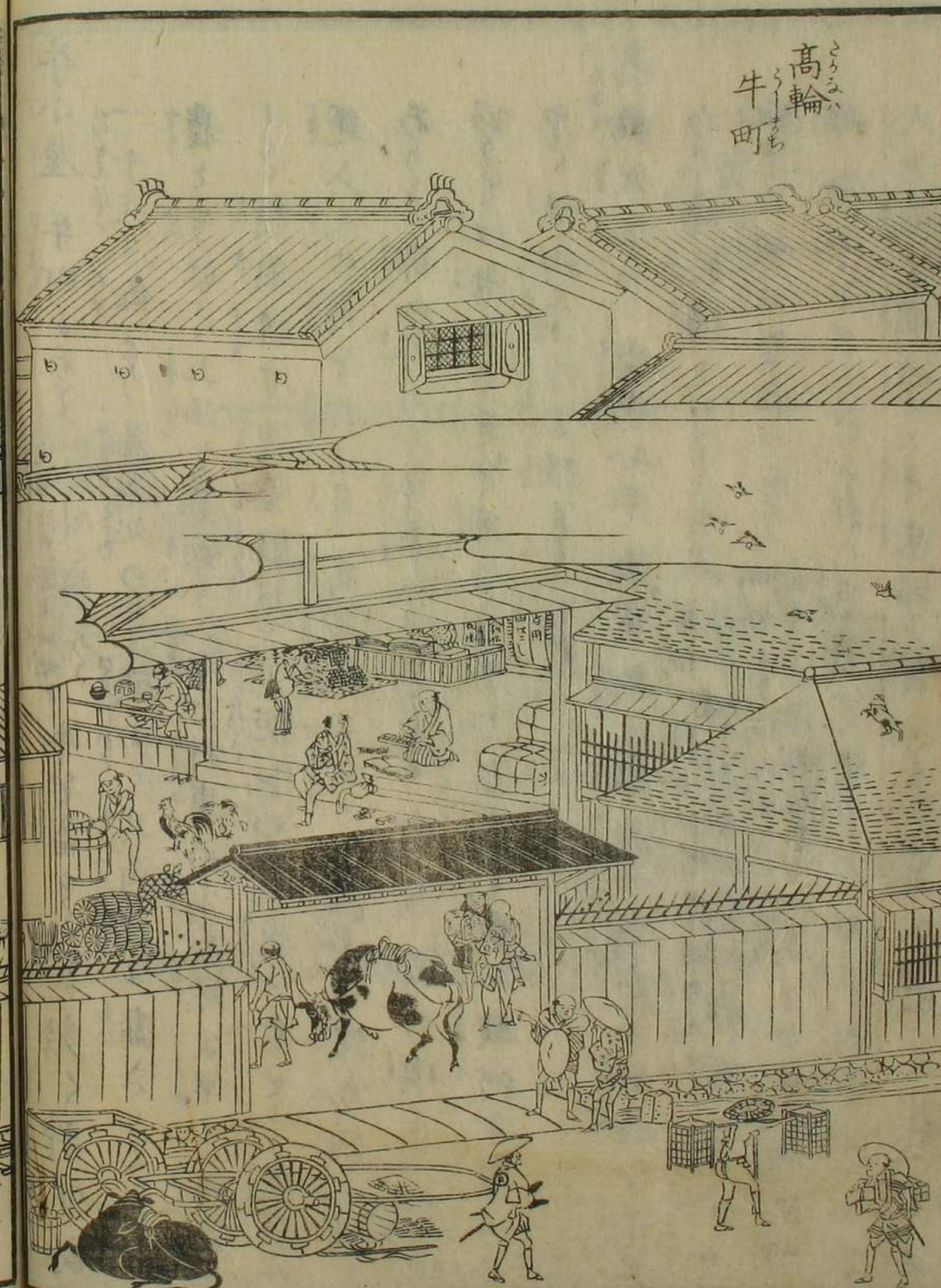
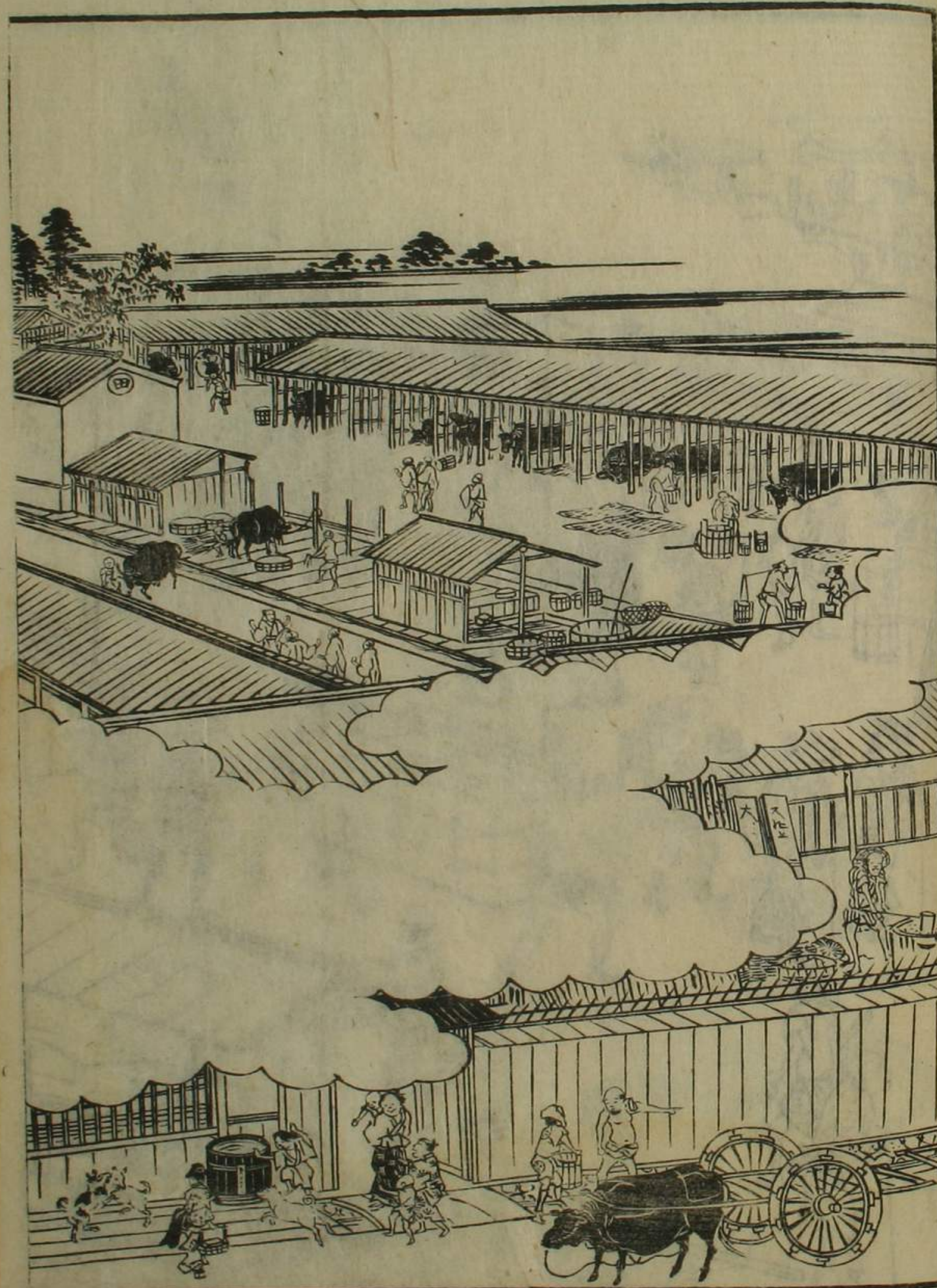
田町より品川迄の七軒と云ハ酒旗肉

肆海亭をもちけられ

京登り東下り伊勢参宮等ハ旅

人を銭と迎ふとて来ぬ

輩ころハ宴を催し常ハ繁

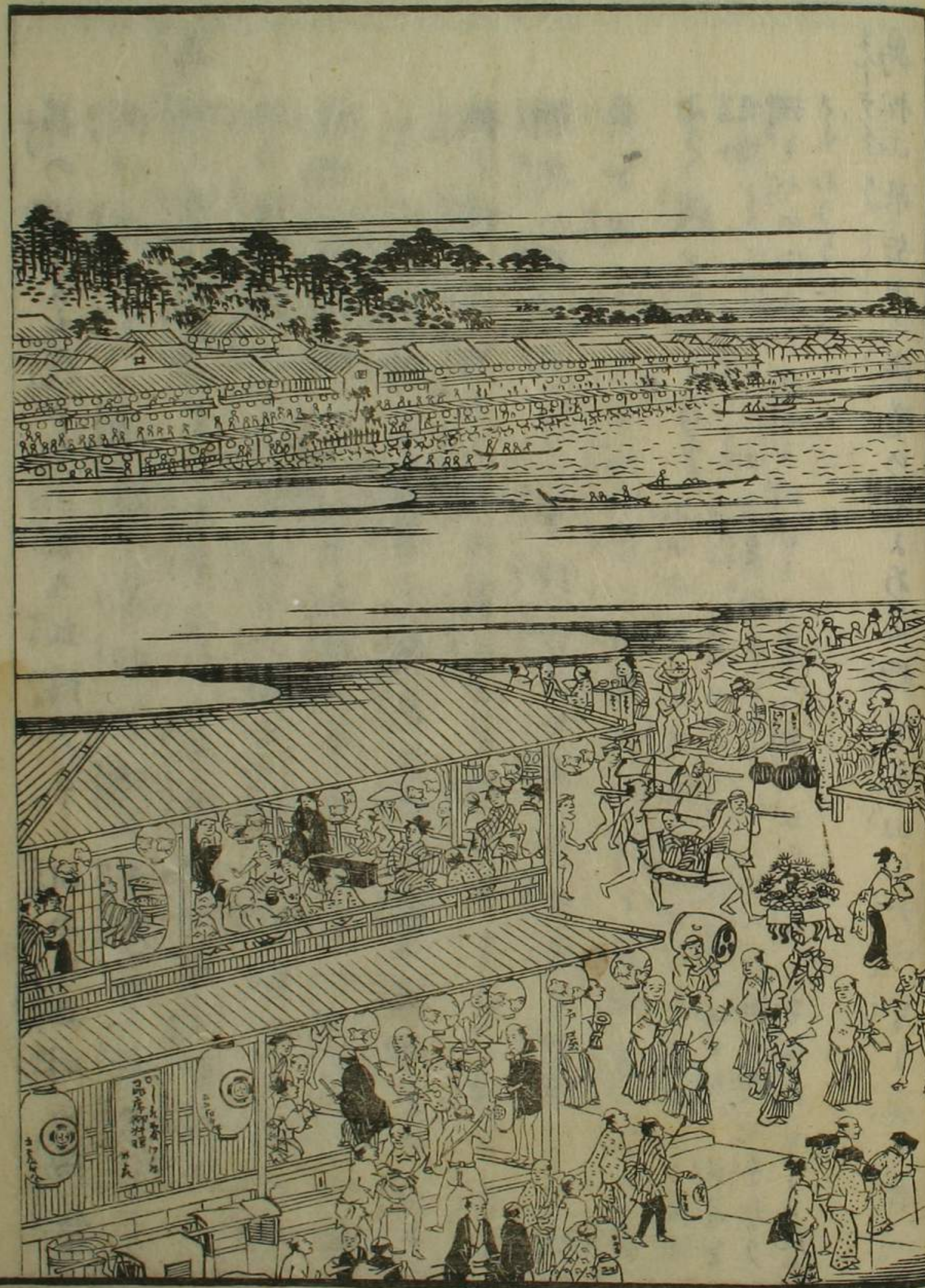


綠海陸郊關高軒
 上路間早朝平吐
 日殘霧半含山遠
 近征帆出東西驛
 馬班長安從此去
 萬里幾人還
 南郭



高輪
 大木戸





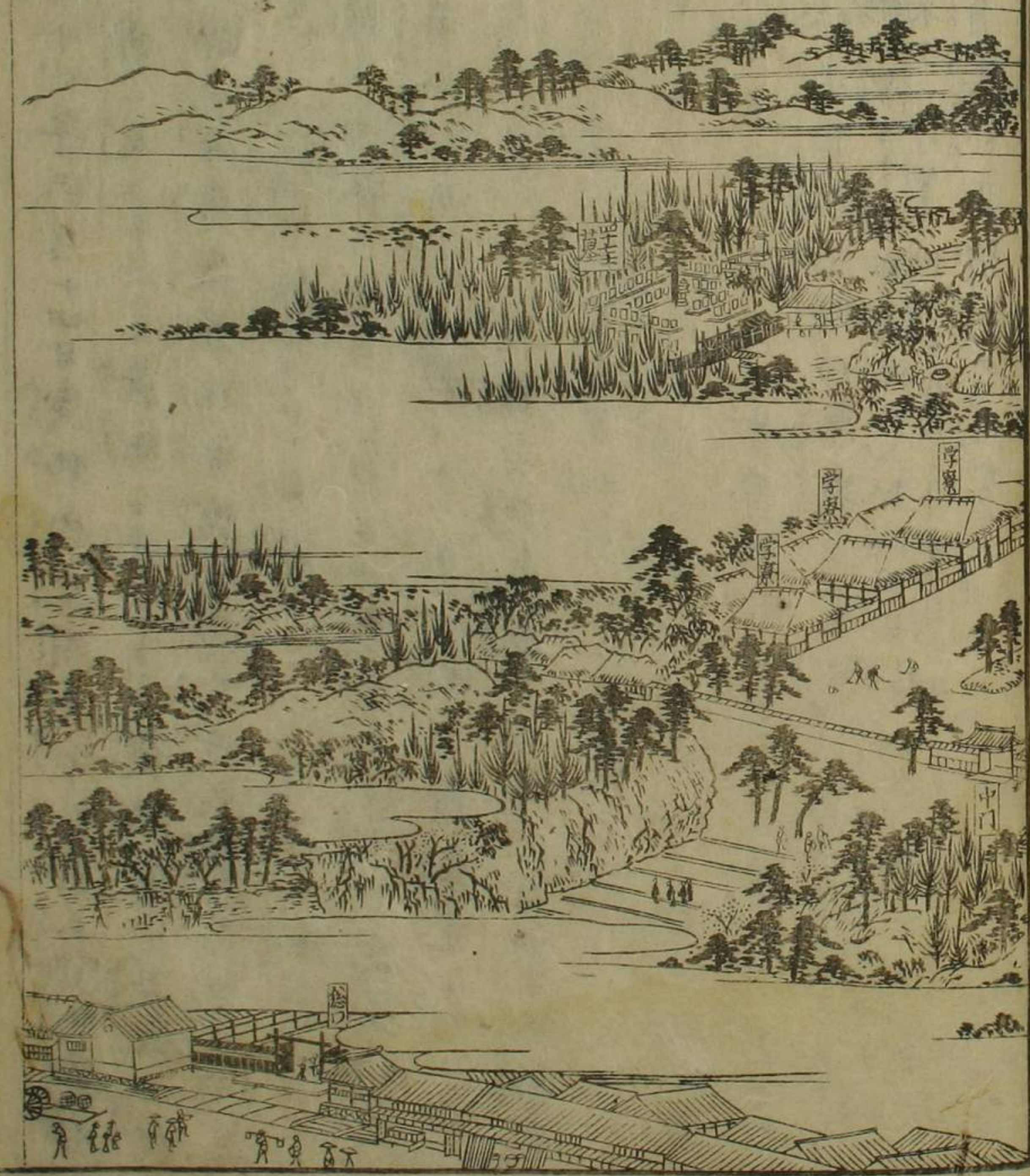
高輪海邊
七月
二十六夜待



昌の地とて後中三田の丘綿く前中品川の海遙
開け諸寄る浦浪の真砂を洗入光景を寂興あり
高輪の原里老云く白金臺及び二本榎品川臺大井村杯
辺り迄の惣称ありとて異本北條五代記上杉修理太夫朝興
武州江戸の城に居住を大永四年正月十三日小田原北条家
より二万餘騎を引卒し朝興を攻めぬ被地を發向を
依り稻毛六郷の上杉の家人より早馬をもち急を告る
朝興ハ俄の事あり軍評定あり及て中途に出迎ひて勝
負を決せしとて小田原の先陣と品川高輪の原
あり渡り合あり小田原記云く永祿信玄小田原を攻むとて高輪の原を渡り合あり
追捕あり又江戸咄云く高輪の原を渡り合あり
萬松山泉岳寺 海道に右あり野州富田の大中寺は屬を曹洞

宗江戸三箇寺の一員とて橋場總泉寺芝青松寺當寺ハ坊舎三字学寮九
宇あり當寺ハ往古慶長年間台命を奉り門庵宗開
和尚外櫻田の地を創建する所此禪刹なりとて後寛永十
八年辛巳再命ありとて寺を今の地に移りたりとて本尊
釋迦如来ハ座像二尺計あり脇士ハ文珠普賢なりとて總
門の額萬松山の三大字ハ華僧國沙門道需の書なりとて
康熙辛酉孟冬上浣と記せり
當寺ハ浅野家の香花院なりとて其家累代の兆域あり
又浅野内匠頭長矩及び義士四十七人の石塔ありとて方丈
より南の丘に半腹あり傍に當寺住僧建る所此石
碑あり其旨趣を注し二月三月の四日及び正月七月の十
六日等ハ英名を追慕しとて集人少く又當寺ハ
義士等の遺物と收藏する多し

浅野家の
 義士を
 かくす
 所の
 川あり
 其南



泉岳寺



元禄十四年三月十四日浅野内匠頭長矩吉良上野介義英
と刃傷し及ぶと長矩は死とあり後其家の長臣大石
内蔵助良雄本國播州赤穂に在る君の讐は共天と
戴へり云の義ふり血盟を以て同志の者をわ
らひ終は元禄十五年十二月十四日讐家に至り義士四十
七人義英の所在を捜し其首級を得當寺に至り亡
君の墓前は祭るの後誅を待り翌十六年二月四日自殺せ
しハ諸書小詳なりと以て之を省く

歸命山如来寺 大日院と號を泉岳寺の南に隣る天台宗
の東叡山は属せり本尊五智如来ハ座像各一丈あり
大佛と稱す木食但唱師の彫造なり但唱ハ佛工やと云ふ
奇如來佛と號せり京都鳴滝の五智山は安樂寺の石像の但唱
五智如来十三佛等ハ但唱の作なり并自の像と云ふ
攝州有馬郡高須村の産なり彼所は靈龜山與勝寺と云ふ

其母有馬藥師は祈請し是を説く
三歳ありて魚肉を食せり九歳初に出家す年十五に至り
木食但善の弟子となり夫より後信州檀特山に籠り
百日の中念佛三昧を修得し向の峯に三尊の影向を
拜し同國浅間嶽及び南紀の那智山等は籠るる各
百日宛又南海北溟の間を普く廻り諸の奇特を云ふ
多し終は江戸に下り寛永十二年當寺を開創し五智如来
の像を作ると云ふ三時念佛の勸は但善
卧龍岡境内堂前北の岡に云形狀を以て号を上の天満
宮の祠あるなり天神山と号す
太子堂 同所旭曜山常照寺といへ天台宗の寺なり聖德
太子の像ハ十六歳の容なり自作なり
元禄年間同校の江戸鹿子といふ所ハ明暦年間越後守光長卿の
隣臣川本ハ兵衛某故あり此所は安置しとあり



稻荷祠 太子堂 庚申堂の中は並ひ立せり高輪に
産土神なり

庚申堂 同一境内にある本尊青面金剛の本像なり 撰州
四天王寺の住侶民部卿僧都豪範の作なり縁起云
大宝元年辛丑正月庚申の日ハ一年の間六度ありて八專
の間日の中より人間は三尸といふ三の悪蟲ありて災と
招く然る庚申と祭る時ハ此蟲退散し身は幸を来りしめ
若不信の輩ある時ハ命根を吸悪業を天帝に訴ふ今帝
釋天王衆生とありし故に汝は此法を附属を我ハ
則青面金剛なり又十二の誓願を示しし僧都信
心肝に命し直に感見しなる所の容を彫刻し普く
衆生に庚申の法を授くとあり

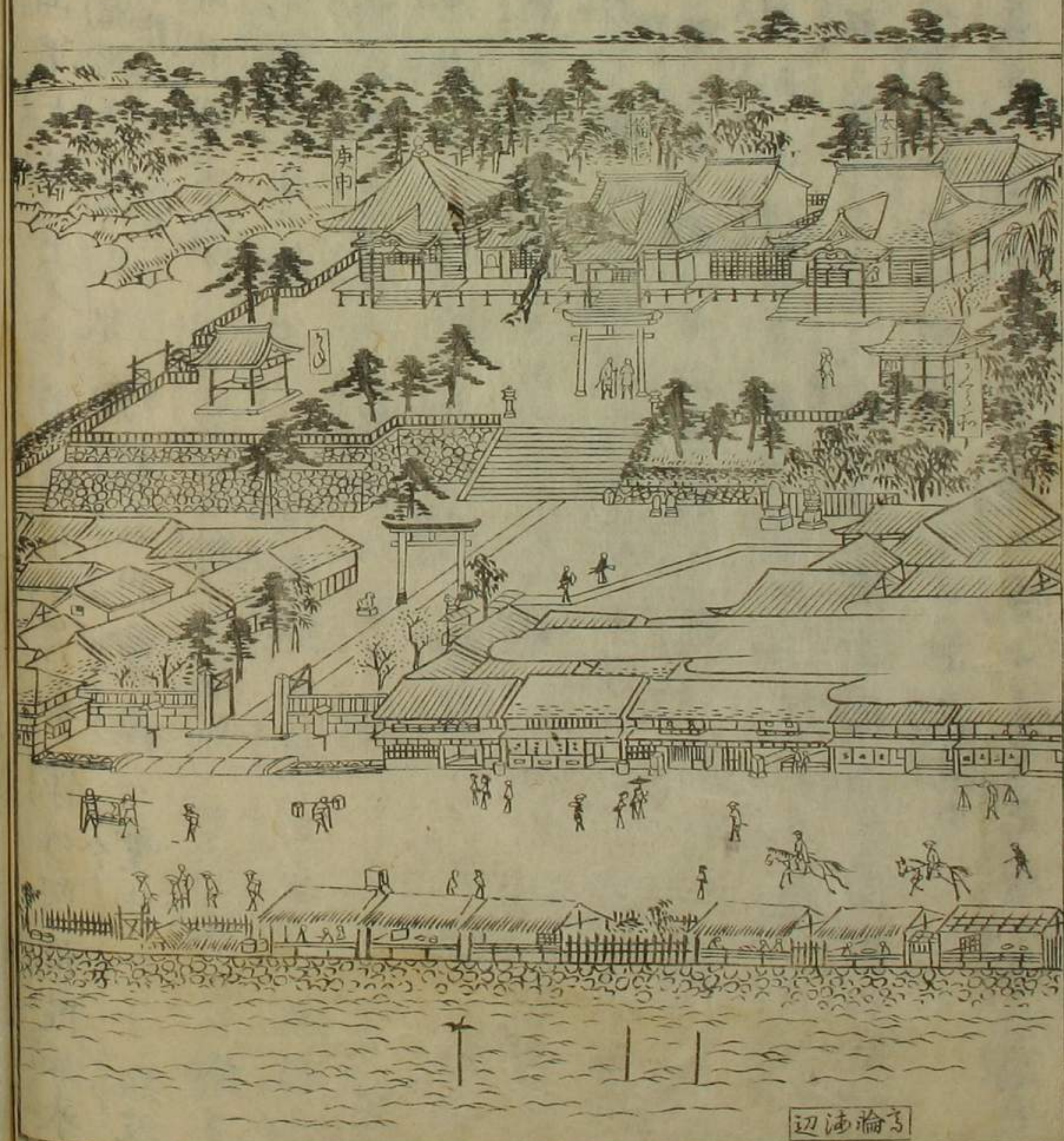
光照山常光寺 同所北町にある浄土宗の芝増上寺は

属の開山は大譽上人と号し本尊ハ金像の阿弥陀如来
なり世に信州善光寺分剎縁起云此靈像ハ聖徳太子難波
の堀江の水面より容を拜しし其の像を鑄さ
しむ後元暦元年播州一の谷合戦の時武蔵國の住人
岡部六弥太忠澄撰州蘆屋の里に陣し其の時或翁
此像を忠澄に受与す忠澄大に歡喜し鎧櫃に収め
出陣せ然る靈威のありて危難を除く刺へ忠度を
討く武名を顯せり依代其家ハ傳へしと獨夜と云僧
故ありて増上寺弟四十六世前大僧正定月和尚へなる
遂に定月和尚件の旨趣を自記しし本尊と共に
當寺に収められし此故なり當寺境内は岡部六弥太
墓と呼ぶ古き石塔の破壊せしものを存せり
珠玉山宝蔵寺 同所にある浄土宗の芝増上寺に属す

常光寺



太子堂
稻荷社
庚申堂





石神社

縁遠き時人
良縁を祈
れ必張あり
較實ハ
社地小何
限らそ
樹木を
習俗と
相傳ハ
石鏡と
又

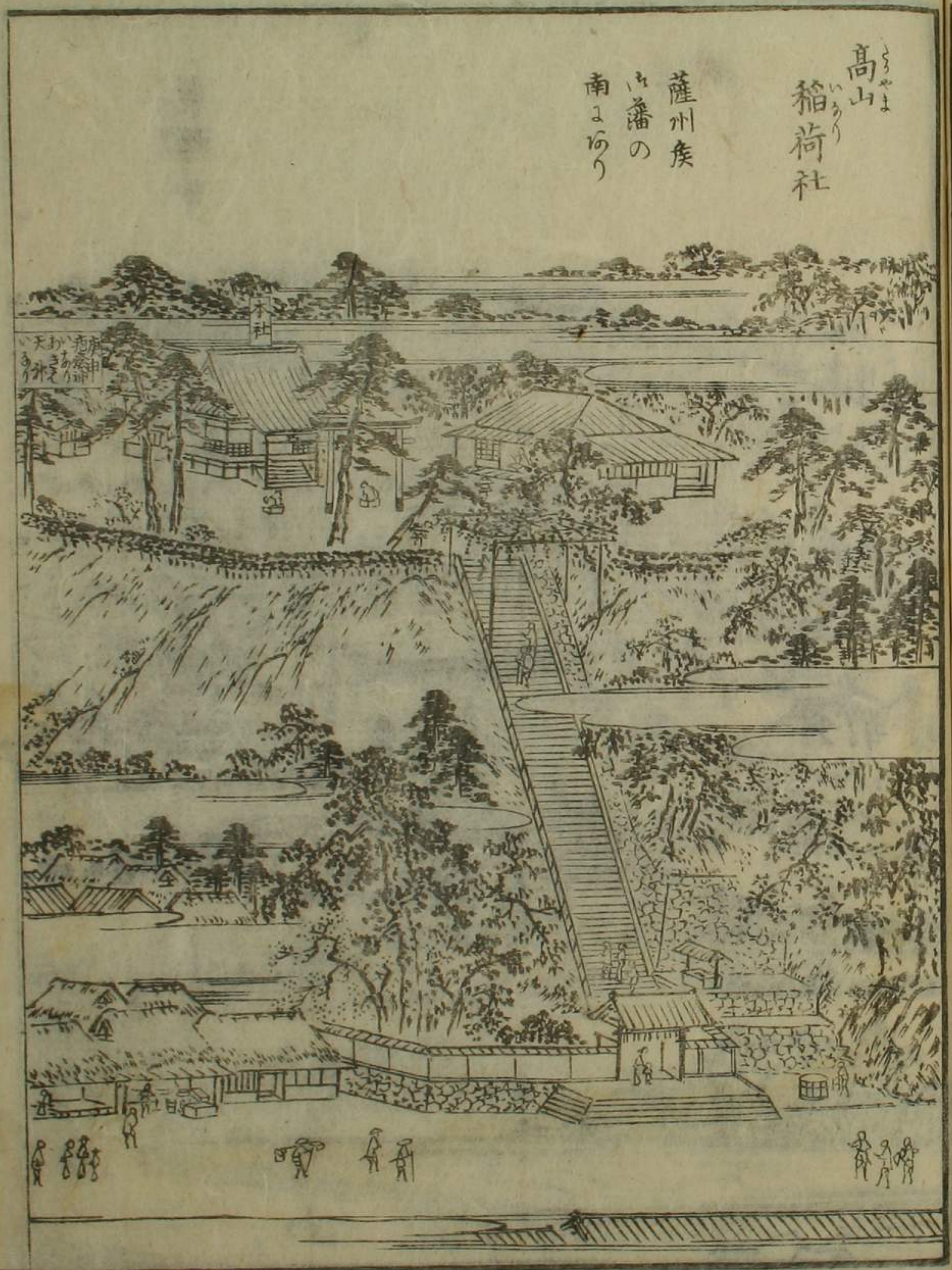
開山ハ順清法印と号し往古ハ慈覺大師開創の梵刹
や〜天台宗なり〜と云ふ所の頃あり今ノ宗風ヲ轉
〜七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興を奉る阿彌陀
如来の像ハ善導大師の作なり〜御座る宝珠と持し〜
故ヨ世俗宝珠阿彌陀如来と稱を
十一月十七日彫刻と鐫
子安觀世音當寺ハ安を画像や〜延喜帝の震筆
なりと云縁起一卷あり和義盛撰と云略縁起ハ
縁起略云建久元年十一月右大將賴朝卿上洛を其
途中一人の婦あり〜告て云く此靈像ハ梁武帝末皇
太子〜時常ハ觀音を祈念〜或時此
靈像と感得なり〜程なく太子降誕〜
昭明太子是なり其後此靈像本朝ハ渡り〜

欽明天皇御崇敬あり又
 醍醐天皇の尊信なりあひ
 震翰を注ぎ縁起を作らせり
 頼朝卿も之を得て鎌倉に安置し
 其頃和田左衛門尉義盛再縁起を書添へり
 此靈像鎌倉兵乱の後當寺に遷し

辨財天 慈覺大師江州竹生島に詣てあひし頃海中
 波間より影現ありし宇賀神社形と模擬し御長七寸
 三分の彫刻なりあひしを當寺に安置し
 石神社 同所高輪南町鹿兒島久留米両侯の間の小路
 を入る西の方二丁にありし祭神詳ならず同所天台宗
 安泰寺の持なり昔ハ遮軍神と作るなり寄願あり者
 成就の後ハ必何より樹木を携へ來り社地に栽る

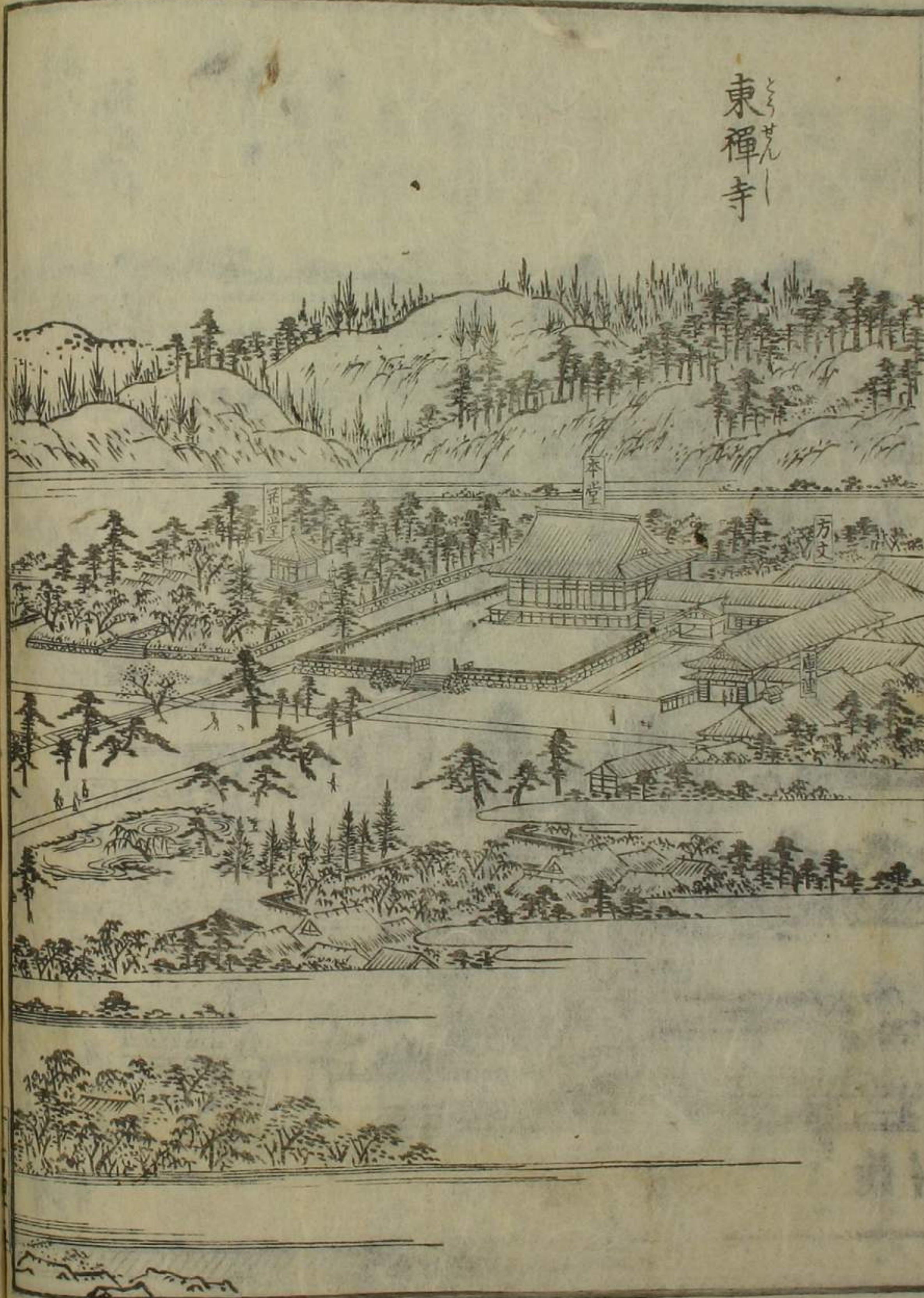
高山
 稻荷社

薩州侯
 藩の
 南より





東
禪
寺



賽さいもとのみ此地このちと石神横町いしのかみよこまちと字なづするハ此社このやしろある所ところなり

佛あまの日山東ひのとう禪寺ぜんじ 同所高輪中町どうしやうがわなかつまちありて妙心派めうしんはの禪宗ぜんしゆ江戸

四箇寺しつかんじの一なり本尊ほんそんハ釋迦しやくぢや如来にがひて開山かいしやんハ嶺南れいなん和尚おしょうと号なづけ

宝鑑ほうかん國師こくし和尚おしょうハ日向國ひやうこく飢肥うへひの人守ひとまもり永氏えいし肥前守ひぜんしゆ祐良ゆうらの五

男おとこわうと幼こうり佛門ぶつもんハ入いる後宗門こうしゆもんの大徳だいとくとて寛永二十年かんえいにじゅうねん 癸未七月みづのえしちがつ廿

七日寂しやくせ慶長けいぢやうの頃ころ江戸えどより来きり阿左布あさふハ一字いちじと號なづけ當寺たうじ

是こゝなり其地そのちを今いまも寛永年間かんえいねんかん今の地ちに移うつる総門そうもんハ海うみに

臨のぞむ此門このもんの額がく海上かいしやう禪林ぜんりんの四大字しだいじハ朝鮮國せんしんこく雪峯せつぽう筆ふで

宝鑑ほうかん錄りく云いふ 救謚きうぎ大だい法鑑ほふかん禪師ぜんし嶺南れいなん和尚おしょう大心中だいしんちゆう與主盟よしゅめい東禪

有あ喜壽きじゆハ懺ざん宮みや寺外じがい右みぎの方かたより安泰寺あんたいじ奉記ほうきす

此地このちと有喜壽きじゆの森もりと号なづく 或人あるひと云いふ古ふるへ老樹らうじゆの傍かたわら一株いちしゆありて

谷や山さん 今云いまいふ所ところハ品川しんがわの入口いりぐちよりありて海うみに臨のぞむとてさし

あつよへと昔むかしハ大日山だいにちさんと号なづけり今いまも此この地ちハ出崎でさきありて草帝そうてい昔むかし

諸侯しよこう八人の第宅だいたくありて今いまも谷山やさんハ邑名いふなありて目黒めくろの南みなみあり

袖そで崎さき仙臺せんたい侯こう別莊べつしやうの地ちの辺へへかけく都みやこ谷山やさん村むらなりと

此地このちハ限かぎりた号なづけり大日山だいにちさんとて昔むかし此この地ちハ石像せきざうの

後世こうせい其堂宇きだうう破壊はくわいせし頃ころ谷山やさん村むらの地ちより又また品川しんがわ北馬場きたばばの光嚴こうげん

寺じへ収こめりといふと今いまハ其その石像せきざうの所ところに松まつをあらす

